

インフィニット・スト
ラトス～つきのおとし
もの～

リバルリー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

—これは、月の落し物を拾つた少年のお話—

※この小説はインフィニット・ストラatosの二次創作です。原作と異なる部分が多々
ありますご容赦ください。

目次

							第1話 再会（リスタート） 3／3
							42
							第2話 不和（デイファレンス）（1）
							60
							第2話 不和（デイファレンス）（2）
							69
							第2話 不和（デイファレンス）（3）
							81
							第2話 不和（デイファレンス）（4）
							98
							第2話 不和（デイファレンス）（5）
							106
							第1話 再会（リストート） 1／3
							18
							第1話 噉天使は再び姿を現す
							22
							第1話 再会（リストート） 1／3
							32
							第1話 再会（リストート） 2／3

		第3話	鈴の音	一	つ	(1)		
		第3話	鈴の音	一	つ	(2)		
		第3話	鈴の音	一	つ	(3)		
		第3話	鈴の音	一	つ	(4)		
		第3話	鈴の音	一	つ	(5)		
		第3話	鈴の音	一	つ	(6)		
		第3話	鈴の音	一	つ	(7)		
		第3話	鈴の音	一	つ	(8)		
212	龍騎相打つ(1)	第3話	鈴の音	一	つ	(8.)		
		5						

220

208 202 192 186 179 170 157 142 126

プロローグ（1話）

僕——白波忍には両親がいない。

母親は僕が産まれた時、父親は僕が三歳の頃に交通事故で亡くなつた。親戚の引き取り手もなかつた僕はお隣に住んでいた千冬さん——織斑さん家に厄介になる事になつた。

なんでも織斑さんのところも両親に捨てられた過去があるらしく千冬さん曰く――

「親のいなくなつた子供を一人で放つておく訳にはいかない」
だそうだ。

その織斑さん家には千冬さんの弟の一夏もいた。

一夏と遊ぶのは楽しい。よくかけっこをする。……いつも負けるけど（笑）一夏は運動得意だなあ……。

千冬さんは怖いけど、なんやかんや優しい。

僕はこの家で暮らすのが大好きだつた。

でも、織斑さん家で暮らす楽しい日々もあの日から徐々に崩れていったんだ……。
とある日、僕たちは海に遊びに来た。
すごく楽しかつた。一夏と僕でビーチバレーをしたんだよ。（僕は泳げないんだ。あ
はは……）

そんな夜、誰かに呼ばれた気がした。

一夏や千冬さんはもう寝てる。ぐつすりだ。

……気のせいだつたのかな……？

『来て……』

……っ！ 気のせいじゃない！ 誰かに呼ばれてる！

僕は外に走り出し、ホテルから出た。

（この時、なぜかホテルの扉が開きっぱなしにならなかった）

外へ出ると、そこには綺麗な満月が広がつていた。

『来て……』

声はビーチの方から聞こえてくる。

僕はビーチへと走つた。

そこには海に流されたのか、クリーム色のマフラーがあつた。

綺麗な留め具で止めてある。

なんだろう？

せつかくだし、持ち帰ることにした。

（この時、なぜか防犯カメラの電源が切れていたことをホテルの人から聞いた。泥棒とか来てないよね……？）

その後、千冬さんや一夏にマフラーのことを聞かれ、包み隠さず話したら千冬さんにげんこつをもらつた。痛かつた……。

千冬さんのげんこつはとてもなく痛いんだ……。痛いけど、その痛さは千冬さんの心配の現れだつて僕は知つてる。その優しい痛みを感じながら僕たちは家に帰つた。

そして、僕が五歳になつた頃、事件は起きた。

日本を攻撃できるミサイルが、一斉にハッキングされたらしい。

千冬さんは何故かいなくなつてたし、怖いよ……。誰か助けて……。

その時、海で聞いた時と同じ声が頭の中に響いた。

『祈つて……。その留め具に、強く……！』

僕は、言われるがまま、強く祈つた。

すると、黒い鎧みたいなものが僕を包んだ。

それには金色の剣と黒いバイザーのようなもの、そして、カラスのような黒い翼が6

枚も付いており、左腕は少し大きくなっていた。

「忍……なんだ、その格好……」

と一夏が聞いてくる。

「僕にも分からぬ……何これ……？」

すると、先程の声が聞こえてきた。

『初めまして、マスター。私は補助・制御人工知能『アルヴィット』^Aと言います。しばらくは私の指示に従つてください』

ま、マスター……？ 訳が分からない。

とりあえず言う通りにしてみよう。

『では、マスター。飛びましょう。鳥が羽ばたくようなイメージで背中の翼を動かしてみてください』

僕は、アルヴィットに言われるがまま、翼を動かした。すると、浮いた。

翼が羽ばたき、僕を空に浮かせてみせた。

僕は高いところは苦手なのだが、この時は全然怖くなかった。

『では、太平洋に向かつて飛びましょう。現在の位置はここ。太平洋の位置はここです』

そう言うと、アルヴィットはマップを目の前に出し、今の位置と大きな海（これが太平洋かな？）に青と赤のマークを出した。黄色い矢印で教えてくれたからわかりやすい。

『では、太平洋の方向に体を向けて、うつ伏せになつてください』

僕は言われるがまま、太平洋に向けて体を倒した。黄色い矢印が今向いてる方向らしい。やつぱり分かりやすい。

『では、行きましょう！翼を羽ばたかせてください』

僕は、思いつきり翼を羽ばたかせた。

プロローグ（2話）

空を飛んでしばらくすると、白い人型が宙に浮かんでいるのが見えた。

あれは、僕が付けてるのと同じ……？

と考えてると、こつちを見てきた。

あれ？なんかヤバイ？

そう思う間もなく、白い人型は一瞬で目の前に移動してこう聞いてきた。

「貴様、何者だ？何故それを纏っている？」

あれ？この声まさか……。

そう思つた僕は慌ててこう聞いた。

「千冬さん！？なんで千冬さんがここに！？いや、その前になんでそれを！？」

あ、そういえばなんか今バイザー降りてるんだつた。

上げなきや分からぬよね。

僕がバイザーを上げたら、千冬さんも驚いたような顔をしていた。

そして、僕は千冬さんから色んなことを聞いた。

今千冬さんや僕が付けてるのは I インフィニット・ストラトス S という兵器で、女の人にしか付けれない

というよく分からぬ仕様があるらしい。

だから、僕はすごい特例らしく、このことは内緒にしてほしいとのことだった。
あれ？じやあなんで千冬さんは女人にしか付けれないなんてことが分かるの？と思つて聞いて見たけど、はぐらかされた。

「……。納得いかない……。

と言つてゐる間に、何かが爆発したような音がした。

ミサイルが発射されたみたいだ。

そのミサイルが近づいてくるのを見て、千冬さんは僕へ向けてこう叫んだ。

「私一人で片付けるからここで待つてろ」

その言葉に僕は怒りを覚え――

「そんなの許さない！千冬さんは一夏を置いて死にたいんですか？！」

気が付いたらそんな言葉が口から出ていた。

すると千冬さんは困った顔をしてこう聞いてきた。

「だが、お前に何か出来るのか？」

確かに、僕には何もできない……。

そう落ち込んでると、アルヴィトがある提案をしてきた。

「マスターの安全を確保するのでしたら、オルトリンドを使いましょう」

オルト…リンデ…？ 何、それ？

そう考える前に、アルヴィイトが説明をしてくれた。

「要是自由に動く小さな飛行機みたいなものです」

うーむ……小さな飛行機かあ……。

でもそれだとミサイルは……。

と思つてると、アルヴィイトは僕の心の声に答えるかのようにこう言つた。

「大丈夫です。オルトリンドは遠くからビームを撃てます。ロボットアニメを見たことあるマスターならビームも理解できるかと」

なるほど！ ビームならいけるかも！ と思つた。

ビームならたしか砲弾を爆発させることも出来たはず！

ミサイルを落とす方法もなんとなくわかつてきた！

そう思つていた時、更にアルヴィイトがこう説明を付け加えた。
「オルトリンドはその姿で敵を切り刻むことも出来るんですよ？」

え、何それさいきよーすぎる……。

……つと！ これ以上考えてるのはまずそのなので、一旦アルヴィイトとの通信をやめ、

千冬さんに説明したけど、オルトリンドがよく分からないらしい。

どう伝えればいいのか悩んでると、アルヴィイトがこう言つた。

「出て来て！オルトリンド！と念じてください」

言われた通りに念じると、僕の周りに六つの短い剣のようなものが現れ、浮いた。これで千冬さんも理解したらしく、こう言つた。

「なるほど、ビットか」

ビット？僕が見たビットはもう少し丸かつたかな……。なんか胞子みたいな……。とにかく、これで僕も何か出来そうだ！」

そして、僕はバイザーを降ろし、ミサイルの撃墜作戦……とは言えないものが始まつた。

千冬さんは前に出て、ミサイルをスパスパ斬り裂いて爆発させていた。

よく見ると、爆発する前に高速でそのミサイルから離れてる。

人がやると簡単に見えるけど実際には難しいってこのことなのかなあと思つた。

すると、千冬さんがミサイルを取りこぼしたのか、後ろを振り向き、僕へ向けてこう

叫んだ。

「忍！ビットを飛ばせ！」

僕は、多分念じるんだろうなと思い、

「あのミサイルを落として！」

と念じた。

すると、オルトリンドのうちの三機が僕から離れ、ミサイルの一つにビームを発射した。

ミサイルは、ビームの熱量に耐えられなかつたのか爆発した。
やつた！僕にも出来た！この調子でどんどん……と喜んでいたら、気付かぬ間に、下にいる大きな船が一つ煙を上げながら沈んでいるのが見えた。

……ごめんなさい……。守れなかつた……。

船の中の人達を守れなかつたことに後悔していると、千冬さんが僕を叱つた。

「忍！まだ来るぞ！ボケツとするな！」

……つ！僕はオルトリンドを自分の周りを囲むように集め、一斉にビームを放つた。
見事に上手くいった。かなりの数を落とした。

そう喜んでいる時、アルヴィトからこう告げられる。

「マスター！これ以上ビームを放つと、エネルギーが持ちません！」

そんな……これからなのに……あれがいけなかつたのかなあ……。

すると、千冬さんから電話から出るような声で優しくこう言つた。

「忍、よくやつた。あとは任せろ」

あの厳しい千冬さんからよくやつたと言われた喜びと役に立てない悔しさを噛み締めつつ、僕はオルトリンドをしまつた。

結局、残りは千冬さんが片付けてしまった。

(この時、軍艦の乗員たちは、何が起きているのか分からず、呆然とするしかなかつたと、後日話している)

後日、軍艦一隻を犠牲に、謎の二機の大型がミサイルを撃墜したこの事件は「白騎士と墮天使事件」と呼ばれるようになつた。

そして、僕は何も起きないまま一夏と同じ学校に通うことになつた。
クラスは違うけど、一夏やその幼馴染である篠ノ之箒と一緒に通うのは楽しかつた。
通うのは、だ。

僕の学校の一日は、女子に黒板消しを投げつけられることから始まる。

白騎士と墮天使事件の後、箒のお姉さんである篠ノ之箒により、ISが発表された。ISは、女性しか扱えず、ISを倒せるのはISだけと言つたので、女尊男卑の風潮が広まり、今、僕に起きているような理不尽ないじめが起きている。

次に、画鋲だらけの椅子。

剥がすための道具も無く、仕方ないので、椅子をどかし、空氣椅子で座り、勉強することになつた。

4時間目が終わり、給食の時間になつてもいじめは終わらない。

今日はカレーライス、ポテチ入りのサラダ、オレンジだつたのだが、そのうちのカレーの係の女子が、僕にカレーをかけてきた。

熱い……。熱くてヒリヒリした。この後は、体操服で過ごすことになった。
一夏や筈が心配してくれたのが幸いだつた。

だが、5年生になり、筈が転校したので、不安が増した。
筈と入れ替わるようにして転校してきた凰^{ファンシィン}鈴音という子も僕のことを心配してくれたのが幸いだつた。

こんな感じのいじめがずっと続き、中学生になつても、いじめは終わらず、さらに千冬さんの試合を見るために一夏まで一時的とはいえないなくなつてしまつた。

しかも一夏は決勝戦の日に攫われ、一夏を助けるために、千冬さんは決勝戦を棄権し、情報を教えたドイツ軍の教官になつてしまい、うちに姿を見せないようになつてしまつた。

そして、中2の頃には鈴もいなくなつてしまつた。

鈴がいなくなつてからいじめはさらにエスカレートしていき、とある日、集団で暴力を振るわれた。

背中と腕に大量の痣ができ、とても痛かつた。

理由を聞いて見ると、

「男のくせに女より綺麗とかふざけるな」と言つてきた。意味が分からない。

担任の先生に助けを求めても、先生は何もしてくれず、このいじめを黙認しているだけだった。

その先生も女性だった。

そして、僕は理解した。

「ああ……女性はこんなにも汚いんだ……」

オリ主設定

白波忍
しらなみしのぶ

主人公。マフラーを巻いているせいでクールに見えるが、実は大のぬいぐるみ好きな男の娘。元々は比較的明るい性格だったが、白騎士と墮天使事件が起こり、女尊男卑の風潮が流れ、学校で女子にいじめられ、担任の女性の先生にもいじめが黙認され、女性不信に陥るようになり、女性に対して冷たい態度をとる。男子とは、普通の態度で接する。（だが、男装してると雰囲気とか香りで分かる。??『こいつはくせえ！香水の匂いがブンブンするぜえーっ！』）

ISに乗れるという理由で、IS学園に編入した。

好きなものは読書（本当はぬいぐるみに囲まれて生活すること。このことは一夏は既に知っている）嫌い、苦手なものはうるさい人、女性。

I S・ヴァルキュリア・ベルフェゴル（女性不信の戦乙女）

これは便宜上付けた名前であり、本当の名称は不明。6枚の翼がある。バイザードがり、これで顔に当たる風をシャットアウトする。搭乗者をサポートするアルヴィートとい

う A.I. があり、一度展開すると、脳内にインストールされる形で起動する。わかりやすく言うと、頭の中に先生がいるっていうかんじ。テストでチート出来るよやつたね！…と言つても、予習で覚えられるようにサポートするだけで、テスト中には何も言わない（当たり前だけど。）武装にもそれぞれ名前が付いている。他にも、様々なシステムがあり、それらにも名前が付いている。脳波コントロールでき、実質第3世代である。ちなみに、最初から単一仕様能力を使用できる。

武装

溶断用マニピュレータ（名称：ヒルド）

不折の剣（名称：スルーズ）

無限生成式の槍（名称：ゲルビルデ）

バイザー（名称：グリムゲルデ）

ダガービット（名称：オルトリンド）× 6

翼型スラスター（名称：ロスヴァイセ）

システム

戦闘指揮、最適化システム（名称：シユヴエルトラウテ）

自動修復、点検システム（名称：ヘルムヴィーゲ）

恐怖心緩和システム（名称：ヴァルトラウテ）

单一仕様能力

神子の祈り（レギンレイヴ）

有害な物質や煙などを吸収し、シールドエネルギーにする超技術な单一仕様能力。しかし、発動中はグリムゲルデを閉めることができないので、吸収する際に命の危険が伴う。

オルトリンド（ダガービット）はビームを撃つことができるソードビット。某万能姉さんみたいにビットのビームでシールドを張れる。6つ全部のビームで敵を閉じ込めることもできる。

ヒルド（溶断用マニピュレータ）は腕が人の腕の形に似せて作られている『シャイニング○○ンガーとはこういうものか』。

スルーズ（不折の剣）は、地球では採れないはずの金属が使われている。（どこかで聞いた設定だな……）

ゲルヒルデ（無限生成式の槍）は、生成された瞬間、即、アルヴィートが次の生成に取り掛かり、一瞬で完成させる。アルヴィートさん過労死不可避。

ロスヴァイセ（翼型スラスター）のイメージは、ガンダムデスサイズヘル（TV版）のハイパージャマーのデカイ方が6枚（3対）付いてるイメージ。ヘルムヴィーゲ（自動

修復、点検システム)は、自分でメンテナンスを行う。(あれ? これもう忍くんいらなく
ね? とか言つてはいけない)

ヴァルトラウテ(恐怖心緩和システム)は、高所、襲われる事への恐怖を和らげ、戦
闘の邪魔をしないようにするシステム。だが、これは、暴走すると、某おつP:D:の付い
たイケメンが暴走した時のような話を聞かない狂人になつてしまふので、注意が必要。
暴走の条件は、トラウマのように突発的な外部的要因の恐怖心が働くこと。

I S 学園編

第0話・堕天使は再び姿を現す

今回試験会場になつたここに、一人の少年が現れた。
その少年に、今回試験官となつた女性が声をかける。

「こんにちは。 I S 学園入学希望者ね？ 私が今回の試験官よ。 よろしくね」

「白波忍です。 今回はよろしくお願ひします」

女性の微笑みに、少年も挨拶を返す。

「今日は、 I S での実技試験を行わ。 まあ、簡単に言うと、貴方がどれだけ適正がある
か調べる、ということね。 じゃあ、 I S を二機出すから、どっちを選ぶか決めて」

そう彼女が説明すると、突然地面に丸い穴が開き、そこから、忍の目の前に二機の I
S が低い台座に乗つて現れた。

一つは、純国産の第2世代 I S 「打鉄」。

性能が安定して使いやすく、後期型 I S がアーマーを大きくして手足を延長している
のに対し、打鉄は操縦者の体格からは大きく逸脱しない。

武装は、大型ブレード「葵」^{あおい}と、アサルトライフル「焰火」^{ほむらび}。

もう一つは、フランス・デュノア社産の第2世代IS「疾風の再誕」^{ラフアール・リヴァイヴ}。

一番最後に出された量産型ISで、世界3位のシェアを誇り、7カ国でライセンス生産されており、12カ国で正式採用されている、一番有力なISだ。

人を選ばないISで、操縦しやすい。

女性は、今か今かと待ち構えているようだつた。

忍は、二機の前に歩み寄り……

打鉄を纏つた。

(この時、もう片方のラファールは、台座と共に地面の中に戻り、穴は塞がつた。)

「へえ、打鉄を選ぶなんて意外ね。大体の人はみんなラファールを選ぶのに」
女性は感嘆の声を上げながら、ラファールを纏つた。

「だつて……打鉄は鉄を打つ、と書くじゃないですか。それなら、貴方が纏う、ラフラー
ルという鉄を打ち倒せると思いました」

忍は挑戦的にそう笑う。

「なるほど……願掛けみたいなものね。それじゃあ、行くわよ！」

そして、試験が幕を開けた。

戦いは、ほぼ同じことの繰り返しだった。

女性が銃を連射し、忍が大型ブレードでその銃弾を弾きつつ、アサルトライフルを連
射。

女性が距離を縮めてくると、忍は大型ブレードを振り上げ、砂煙を巻き上げ、距離を
離させた。

そして、今、お互にシールドエネルギーはあと僅かだつた。

「ここまでよくやつたわ……。でもパターンが少ないわね。もう少しパターンを増やし
た方がいい。まあ、それは私もだけど……」

「はあ…はあ…そりやどうも」

「さあ…これで終わりにしましよう」

そう言つて、女性は銃を向けた。

「ええ…。これで決着をつけましょう」

そう言つて忍が、アサルトライフルを向けた瞬間、

アサルトライフルがマズルフラッシュを素早く焚いた。

女性は素早く左に避け、銃を構え直す。

その瞬間、大型ブレードが女性目掛けて飛んできた。

女性は慌てて右に転げ回つたが、女性が起き上がる前に忍が、高速で直線的な飛び蹴りを与えた。

(まさか、イグニッショーン・ブースト瞬間加速を銃を撃つているときと私が剣を避けている間に貯めるなんてね…してやられたわ…)

そして、実技試験は、忍の勝利という形で、幕を下ろした。

第1話・再会（リスタート）1／3

入学式が終わり、忍たち新入生は一年一組の教室へと案内された。

その教室の教壇に立つ眼鏡をかけたやや低身長の女性が教室を見渡し、こう挨拶する。

「全員揃つてますねー。それじゃあS H Rをはじめます！私は副担任の山田真耶ショートホーブルーム やまだまやです。今日から一年間、みんな仲良くしましょうね！よろしくお願ひします！」

副担任の山田先生の挨拶を聞いた忍は……

（どうせこの教師も、男子がいじめられていても、助けないんだろうな）
と、そう感じていた。

それよりも忍は、教壇の目の前にいる学生を注視する。

入学式の時は気付かなかつたのだが、教室に案内された時に気付いた。

忍以外にも男の制服を着ている者がいたのだ。

それと、気のせいだとは思うが、後ろ姿が心なしか一夏にそつくりに見える。

そうこうしている間に、山田先生が生徒達に自己紹介を促した。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。ええっと、出席番号順で」

クラスの女子たちが順番に自己紹介してゐるのを聞きながら、忍は内心イライラしていた。

先生の煮え切らない態度と、さつきから、クラスの女子たちの視線が自己紹介をしている人にはなく、忍ともう1人の彼に刺さつてゐるのが感じられるからだ。

(ああ・早くここから消えたい)

忍は心の中でそう呟きながら、男子生徒の方へと目をやると、彼は横を向いていた。その横顔に、忍は見覚えがあつた。

(間違いない：一夏だ！なんで一夏がここにいる！？)

忍は思わず立ち上がりそうになつたが、落ち着いて、一夏の目線を追つてみる。

そこには、あの彼女がいた。

あの時一夏が助けた女の子。

忍を気遣つていた女の子。

篠ノ之^{しのの}篠^{のの}がそこにいた。

黒髪のポニー^{テール}。

そして、鋭い目つきで忍はなんとなく分かつた。

(篠もこの学園に？いや、篠は女性だからここに入るのは当たり前なのか：あつ、篠が窓の外に顔を逸らした)

忍は一夏が可哀想に見えると、同時に自分にも気づいて欲しかったかなあ……とも思つた。

「一夏くん？ 織斑一夏くん？」

「は、はいっ！」

一夏は考え方をして、自分の番が来た事に気付いていなかつたようだ。

周りからくすくすと笑い声が聞こえる。

（人を小馬鹿にしてこつそり笑うなんて……）

忍は再びイライラする。

「あの、大声出してごめんね。怒つてる？ 本当にごめんなさい！ でも、あ、あの、「あ」から始まつて今「お」なんだよね、自己紹介、してもらえるかな？ だ、ダメかな？」

山田先生はおどおどして、何度も何度も頭を下げながらも、自己紹介を一夏にお願いしていた。

「いや、あの、そんなに謝らなくても…自己紹介もしますから、先生落ち着いてください」
そう一夏が宥めると、山田先生はがばっと顔を上げ、一夏の手を掴み、熱心に一夏に詰め寄つた。

「ほ、本当？ 本ですか？ や、約束ですよ？ 絶対ですよ！」

（まあここでヘマをすると環境に馴染めなさそうだ。僕は馴染まない方がいいけど……）

一夏、頑張れ)

忍は心の中で一夏を応援する。

一夏は立ち上がり、後ろを少し向いた。

女子たちは、全員一夏に視線を向けている。

筈も、横目で一夏を見ていた。

そして……

「えー……織斑一夏です。よろしくお願ひします」

一夏は自己紹介をし、儀礼的に頭を下げて、上げた。

だが、JKと呼ばれる時期の女子。

男性のことはもつと知りたいだろう。

ましてや、この学園に2人しかいない男子ともあれば、この程度の自己紹介で満足で
きるはずもなく……

(もつと色々喋つてよ)

とでも言いたげなクラスメイトの女子たちの視線が一夏に刺さる。一夏は見るから
に焦つていた。

「……」

一夏は大きく息を吸い込む。

（もつと聞きたい！）

という女子たちの期待の視線が一夏に向けられる。

そして、一夏が口を開き……

「以上です！」

ズコーンというずつこける音が聞こえる。

忍も、あまりの虚しさに呆れかえつてしまつた。

「あ、あのー……」

一夏にかけられる山田先生の声。

しかも涙声っぽさが増してゐる。

「え？あれ？ダメでしたり？」

そう一夏は狼狽えるその直後……

ガソッ！

という音が響いた。

その音は拳骨で出るような音ではない。

手に持つ出席簿で一夏の頭を叩いたその人物は……

そうあの人……

「いつ——!? げえつ、 関羽!?」

(一夏……)

一夏がふざけた事を口走り、

再びガンツ! という乾いた音が鳴り響く。

(……そりや叩かれるよ、 自業自得だ)

忍が呆れ果てて いる内にトーン低めの声で一夏を叩いたその人——織斑千冬^{おりむらちふゆ}がこう言つた。

「誰が三国志の英雄か、 馬鹿者」

そんな千冬先生に山田先生が声をかけると、

千冬先生は、一夏にかけた声とは比べ物にならないくらい優しい声で答えた。

「あつ、 織斑先生。 もう会議は終わつたんですか?」

「ああ、 山田君。 クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな。」

「い、 いえつ。 副担任ですから、 これくらいはしないと……」

先程の涙声とは違い、 若干熱っぽい声と視線で千冬先生へと応えている。 しかもはに

かんだ。

(……主人に甘える犬かよ)

忍は心の中でそう悪態をついた。

そして、千冬先生は教壇へ上がり、こう挨拶する。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にするのが仕事だ。」
すると、女子たちから黄色い声援が響いた。

「キヤーッ!!?. 千冬様、本当の千冬様よ!!?.」

「ずっとファンでした！」

「あの千冬様に指導していただけるなんて嬉しいです!!?.」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです、北九州から！」

「私、お姉様のためなら死ねます!!?.」

こう騒ぐ女子たちを千冬先生は鬱陶しそうな顔で見る。

「…毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。いや、それとも私のクラスに馬鹿者を集中させてるのか？」

すると、また黄色い歓声が上がった。

「きやあああああっ！お姉様！もつと叱つて！罵つて!!?.」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないようになまこをして〜!!?.」

騒ぐ女子たちに忍は心の中でまた悪態をついた。

(…うるさい。そして女子は虐められたいのか？俺が知ってる女子は虐めるのが好きそうだつたぞ)

そして、千冬先生の視線は一夏に向き、「で？挨拶も満足に出来んのか、お前は」と、一夏に辛辣な言葉をかけた。

だが、事実なので仕方がない。

「いや、千冬姉、俺は――」

一夏が言い訳を始める前に、
ガソル！という音がまた響いた。

「織斑先生と呼べ」

「…はい、織斑先生」

その時、教室が静まり返った。

「え…？ 織斑君って、あの千冬様の弟…？」

「それじゃあ、世界で二人だけのＩＳを使えるって男だつていうのも、それが関係して…

？」

「いいなあ、変わつて欲しいなあ」

という声が聞こえる。

「……」

「さて、……面倒だが挨拶をしろ、白波」

そんな中で千冬先生が忍に話を振つてきた。

「……分かりました」

忍はそう言い、立ち上がる。

そしてワザと低めなトーンで自己紹介をした。

「白波忍。好きなものは読書。嫌いなものはうるさい人や場所。まあ短い付き合いだが、よろしく」

『関わるな』と言おうとしたが、ここは2人の例外を除き、女子だけが操縦できるパワー・ドスースのことを勉強する学園。よつて2人の他には女子しかいない。そんなところで女子に喧嘩を売るようなことをすれば、小中学の二の舞どころか、さらに酷い目に遭わされるかもしれない。だから、その妥協案として、低いトーンで自己紹介をしたのだ。忍が自己紹介をし終えたところで、チャイムが鳴った。

「さあ、S H Rは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半年で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくとも返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

千冬先生はそのチャイムを聞いて、そう指示を出した。

(…ちょっと横暴な気もするが。)

忍は思つたが、その思考は、今日何度も聞いた、ガンツ！という音にかき消された。
一夏が千冬先生に殴られたみたいだ。

「席に着け、馬鹿者」

…一夏は泣いていい。

第1話 再会（リスタート）2／3

「一夏」

一時間目のIS基礎理論授業が終わり、忍は一夏に声をかけた。

「おお、忍！ 良かつた、お前と一緒のクラスで！」

一夏は忍を見た途端、ぱあっと表情が明るくなつた。

「うん。僕も君がいてくれて良かった。周りは女性ばかりで嫌だしね……でも、なんで一夏はこの学園に？」

「ああ、それは……」

一夏はこの学園に入るまでの経緯を説明した。

「……つまり、藍越学園の試験会場に行く途中に迷子になつて、間違えてこの学園の試験を受けて、無事ISを起動した、と。……普通の学校の試験なら着替えないだろうし、そちら辺で気付かない？ 確かに今は落とす可能性があるからか、受験票とか無くなつてるけどさ……」

「あはは……何も言い返せねえや。……だけど、なんで忍はこの学園に入れたんだ？ お前も偶然ISを起動できたのか？」

忍は、首を横に振つて、一夏の問いを否定する。

「じゃあ、なんで…？」

「一夏は5歳の頃のこと、覚えてる？」

「ああ、その時は【白騎士と墮天使事件】が起きたな。それがどうかしたか？」
 「やつぱり忘れてる…？あの時、一夏も見たよね？僕が黒い鎧を纏つたの」
 「え…？あつ？あの時の！？じゃあ、【墮天使】って呼ばれてたのは…？」
 一夏が言いかけたその時だった。

「…ちよつといいか？」

凛とした声が、忍と一夏の会話を遮つた。

二人が声を掛けられた方を向くと…：

「…箒？」

六年ぶりに再会した、幼馴染がそこにいた。

「…」

「…」

「…」

箒に連れてこられた屋上で、3人とも静寂を守つている。

その静寂を最初に破ったのは——一夏だつた。

「……そういえば、箒」

「何だ？」

「去年、剣道の全国大会で優勝したつてな。おめでとう」「……／＼

（ああ、やつぱりな）
箒は一夏の祝いの言葉を聞くなり、顔を赤らめた。

その箒の反応を見た忍は確信した。

箒は、一夏に恋をしている。

恐らく虐められている箒を一夏が助けたという日からだろう。

「…なんで、そんなこと知ってるんだ」

箒は一夏にそう問いかける。

「なんであつて、新聞で見たし…」

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ！」

「はあ!!?」

一夏たちが言い合つてる横で忍は……

（ああ、違う違う。一夏、箒はきっと、貴方に頑張つてたところを見て欲しかつたんだよ。

僕も一応ＴＶで見たしね）

そう心の中で呟いていた。

箒と一夏の言い合いが落ち着いた頃、また一夏が思い出したように口を開く。

「あー、あと」

「な、何だ!!?」

箒が怒ったような感じで問う。

そんな箒の剣幕に一夏は押されたようで、黙ってしまい、答えを声に出そうとしない。

「あ、いや……」

どうやら一夏が箒の剣幕に押されていることに、箒は気付いたようだ。ばつが悪そうな感じになつた。

剣幕から開放された一夏が、先ほど声に出せなかつた答えを出す。

「久しぶり。六年ぶりだけど、箒つてすぐ分かつたぞ」

「え……」

「ほら、髪型一緒だし」

すると、箒は少し照れくさそうに、ポニーテールをいじりだした。

「よ、よく覚えてるものだな……」

声も少し嬉しそうだ。だが……：

「いや、忘れないだろ、幼馴染のことくらい」

という一夏の発言で、篝は無言のまま一夏を睨んだ。

そして、

「ふんっ！」

篝はそう言つて一夏から離れ、遠くで空を眺めていた忍に声をかけた。

「久しぶりだな、忍。元気にしていたか？」

「……うん、おかげさまで」

忍は冷ややかな声色で返事をした。

「……私の知らない間に、少し冷たくなったか？」

「……そうだね」

「一夏には普段通り話すのに、私に対しては冷たいな……」

「……僕は女子に嫌われるような振る舞いをした。それなのにあまり近付かれると君にも被害が及ぶ。……それに、一夏が好きなのに、僕の隣にいられても困る」

忍が小声で篝に囁くと、

「つ！？／＼」

篝は顔を赤らめた。

「ほらほら、行つた行つた」

そう言うつて忍は「あつちいけ」のジエスチャーをする。

「あ、ああ……」

箒が言い、忍に背を向けた途端、チャイムが鳴り出した。二時間目の始まりを告げるチャイムだ。

それまでこつそり三人を遠巻きに見ていた野次馬たちも、蜘蛛の子を散らすように去つていく。

「さあ、僕らも急ごう。始まるまで時間がない」

「おお、そうだな。俺たちも戻ろうぜ、箒」

「わ、分かっているつ」

そういうと、箒は踵を返して、教室に戻つていく。

忍も焦つたように早歩きで、教室に向かう。

その二人を追うように一夏も教室へと駆け出した。

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点での国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ……」

山田先生は、すらすらと教科書を読んでいく。

生徒たちも、黙々とノートを取つてゐる。

——偶然ＩＳ学園に入学することになった、一夏を除けば。

(……やべえ、このアクティブなんぢやらとか広域うんたらとか、どう意味なんだ？全然分からねえ……というかこれ、全部覚えなきやいけないのか…?)

一夏は積まれた五冊の教科書の一番上のもののページをぱらりとめくるが、よく分からぬ単語がずらりと並んでおり、さっぱり分からなかつたようだ。

「——では、ここまで何か質問のある人はいますか？」

山田先生が何か分からぬことがある人はいなかと尋ねる。

だが、一夏は先生に全然分からぬと言つのが少し怖いらしく、隣の女子に聞こうとしたが――

「織斑くん、何か分からぬところがありますか？」

理解していなさそうな顔をしていた一夏に気付いた山田先生がそう一夏に尋ねた。

「え！あ、あの…えっと…」

一夏はあたふたしつつ、教科書に目を落とすが、やはり内容はさっぱり分からなかつた。

「分からぬことがあつたら訊いてください、何せ私は先生ですから！」

えつへんと言わんばかりに胸を張る山田先生。

一夏は聞こうと決心した。

「先生！」

一夏が手を挙げる。

「はい、織斑くん！」

山田先生は、やる気に満ちた返事をする。

そして、一夏は、質問の内容を山田先生に伝える。

「ほとんど全部分かりません……」

「え…？ ゼ、全部、ですか…？」

山田先生の顔が困惑した表情になる。

《ああ…これは困ったことになりましたね…》

A I 「アルヴィイト」が忍に語りかける。

(うん、そうだね。一夏は望んでここに来たわけじゃない。間違つて I S 学園に来たわけだから、土台が出来ていらないわけだし。参考書もあつたけど、あの厚さを試験後から入学式の短い期間で全部覚えるのはすごく難しい。僕は I S を纏つたあの後から、I S の勉強を始めて、今ここにいるけど……)

《先生側も、I S の知識をほとんど持たないまま入学する学生、男子が入学することになるなんて思っていないでしようからね…》

(……うん。 そうだね)

「え、えつと……織斑くん以外で、今の段階で分からないつていう人はどれくらいいますか？」

「ここで山田先生がクラスの全員にそう問い合わせるが、誰も手を挙げることはなかつた。」

「えつ？えつ？」

一夏は明らかに困惑している。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

千冬先生が一夏に尋ねる。

「ああ、分厚いやつのことですか？」

「そうだ。必読と書いてあつたはずだろう？」

「いや……古い電話帳と間違えて捨てました」

スパンツ！

千冬先生は、今度はバイインダーで殴った。

流石に痛そうだ。

「あとで再発行してやるから、一週間以内に覚えろ。いいな」

「いや、一週間での分厚さはちょっと……」

一夏はそう反論したが……

「やれと言つている」

その言葉と同時に送られた有無を言わざぬ鋭い目つきに一夏は素直に従う他なかつた……。

「……はい、やります。」

そんな一夏を心配して、山田先生が一夏の両手を握り、詰め寄つて、優しく声を掛けた。

「え、えつと、織斑くん。分からないところは授業が終わつてから放課後教えてあげますから、頑張つて、ね？ ねつ？」

「はい。じゃあまた放課後、お願ひします」

「はいっ！ 任せてください！」

「さあ、山田先生、授業の続きを。」

「は、はいっ！」

そして、山田先生は教壇に戻り——こけた。

「うー…いたたた…」

(この先生、大丈夫なんだろうか……)

一夏と忍は山田先生に不安を覚えていた。

第1話. 再会（リスタート）3／3

二時間目が終わった後の休み時間。

「少し、よろしくて？」

一人の女子生徒が一夏に声をかけた。

「へ？」

一夏は、何か考え事をしていたのか、呆けたような声を出してしまった。

「まあ！なんですね、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光榮なのですか
ら、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

その彼女の言葉に忍は焦燥する。

（ああ、クツソイライラする。ああいうのがいるから女子は信用ならん。そして取り巻

きができる。そして、権力を振りかざして男を虐める。本当、バカみたい）

《その通りですね。ですが、これが今の世界の現状なのですね……》

（ああ。だから、僕はいつか……）

忍とアルヴィトが脳内会話をしていると、一夏が口を開いた。

「悪いな。俺、君のこと知らないし」

(まあ千冬先生のことしか頭になかったし仕方ないわな)

忍はそう思つたが彼女はそう言われたことが気に入らなかつたらしく、吊り目を細め、見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない!?」このセシリア・オルコットを?イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!?

どうやら、彼女はセシリア・オルコットというらしい。

その時、一夏が質問の可否を問う。

「あ、質問いいか?」

「ふん。下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」
明らかに見下した口調。

忍は読んでいる本を握りしめた。

そして、質問の許可を得た一夏は、その質問の内容を伝える。

「……代表候補生って、何?」

ズコーンと、聞き耳を立てていた女子の何人かがずつこけた。

「あ……あ……あ……」

「あ?」

「あなたつ、本氣でおっしゃつてますの!?

セシリ亞の甲高い声に再び忍は焦燥。

（……うるさい。僕がうるさい人は嫌いって言つたの聞こえなかつたのか？）

忍の顔には、青筋が立つてゐる。

「おう。知らん」

一夏はバツサリ言い切つた。セシリ亞は怒りが一周して逆に冷静になつたらしく、こめかみを人差し指で押さえながらブツブツ言い出した。

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、ここまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

セシリ亞がそう呟いた途端、パタンッという音が聞こえた。

その方向を見てみると、そこには本を閉じ、机に置いた忍がいた。

忍は席を立ち、セシリ亞に詰め寄る。

「な、なんですか……？あなた……？」

セシリ亞も少し警戒しているようだつた。

「なあ、あんたさ」

「な、なんですか……？わたくし、何かしまして……？」

忍に声をかけられたセシリ亞は動搖していた。

「あんたその極東の島国にいるのに、なんでその国を侮辱なんてできるの？バカなの？」

そしてあんた声張り上げてキーキーうるさいんだよ。静かに本読ませてくれない？僕うるさい人嫌いって自己紹介の時言つたけど、聞き逃した？なら今ここでもう一回自己紹介しなおそろか？」

「う、うう……」

忍の剣幕に、セシリ亞も少し引いたようだ。

「ま、まあまあ。で、代表候補生つて？」

「そこの女子に変わつて僕が説明するね。代表候補生つていうのは国家代表IS操縦者の候補に選ばれた人のこと。まあ彼女はエリートって言いたいんだろうが、エリートも僕らも同じ人だ。大して気にする必要はない。むしろ、僕はエリートだからといって人を見下すような人の方が下だと思う。例え勉強が出来なくとも、自分を他の人より上の立場だと見なければ自然と人は付いて来るさ」

「ぬ、ぬぐうううう……」

忍にプライドをめちゃくちゃにされたセシリ亞。

「……大体、あなたISについて何も知らないくせによくこの学園に入れましたわね。世界に一人だけ男でISを操縦できると聞いてましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思つてましたけど、期待外れですわね」

「いや、考えれば分かるだろう？男でもISを操縦できる人だぞ？だつたら、どこかの国

に入れさせるより、中立の立場のこの学園で保護した方がマシでしょ」

「ぬぐう……」

またセシリアが引き下がる。

「俺に何か期待されても困るんだが……」

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

「あれ、さつき言つたはずだけど？ 見下すやつの方が下だつて。あと、あんたのような態度が『優しい』というのなら、他の人は何というのかな？」

「ぬ、ぬうう……あなたいちいちわたくしの言葉に突つかかるのやめていただけませんこと！？」

「なんで？ 僕は正しいことを言つてるつもりだけど」「そういうことでは……！」

と、ここで3時間目のチャイムが間にに入る。

「つ……続きはまたあとで！ 逃げないことね！ よくつて！？」

良くなないが、ご機嫌を損なわせても面倒くさいので、取り敢えず忍たちは領いておくことにした。

「それでは、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違い、千冬先生が教壇に立っている。

よっぽど重要なことなのか、山田先生もノートを手に持っていた。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。ちなみに、クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで。自薦他薦は問わない。誰かいないか」説明し終わり、自薦他薦は問わないので誰かいないか、と千冬先生が訊くと、女子の一人が手を挙げ、

「はいっ。私は織斑くんを推薦します」

と、一夏をクラス代表にすることを薦めた。

「私もそれがいいと思います！」

と、もう一人がそれに同意し、

「私は白波くんを推薦します！」

と、一人が忍を薦め、

「あつ、いいね、それ。私も白波くんを推薦します！」

と、もう一人がそれに同意した。

それを聞いた忍はため息をこぼしつつ、こう言つた。

「マジかあ……。まあ、やらなきやいけないだろうしやりますよ。ただし、僕にはあまり深入りしないで欲しい」

「うん、分かつたー」

先ほど忍を推薦した女子がそう了承する。

「誰にだつて知られたくないことくらいあるもんね！」

それに同意した女子も了承してくれた。

「ごめんなさい。助かります」

忍はそう言うのと同時に、こう思つた。

（あれ？こここの女子つて意外と優しい？いや、まだ分からぬから様子を見よう。何か企んでるかも知れない）

クラスの意見を一通り聞いた千冬先生はこう言う。

「では候補者は織斑一夏と白波忍：他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」「お、俺！？」

今までちゃんと話を聞いていなかつたのか、驚きながら一夏が立ち上がり、そしてク

ラス中の視線が一夏に刺さる。

「これは、『織斑くんなら何とかしてくれる』という勝手な期待を込めた眼差しだ。『織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか? いないなら2人で決着をつけて決めてもらうぞ』

千冬先生が辛辣な一言を放ちながら話を終えようとする。
「ちよ、ちよつと待つた!俺はそんなのやらなーー」

そう一夏が反論をしようとした。その時、

「納得がいきませんわ!」

そう遮る声が響く。

(セシリア…えつと…アプリコット…?)

《オルコットですよ、マスター》

忍たちが脳内漫才をしている間に、セシリアはこう続ける。

「そのような選出は認められません! 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ! わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃいますの! ?」

「……」

忍は女尊男卑という風潮があるため、怒りを抑えるために、拳を作り、握り締めた。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しい理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであつて、サークスをする気は毛頭ございませんわ！」

「……」

『マスター……』

先ほどは冷静になれず、突つかかつたが、忍は、今度は歯を食いしばって怒りを抑え

る。だが、次国や人を侮辱する言葉をセシリアが発したら、キれない保証はない。

むしろ、今我慢の限界なのだから、これで最後にして欲しい。

そう忍は思っていたが、その願いは次のセシリアの言葉によりあつさり壊されることになる。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはならないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で——」

ツツン。

と、忍の頭の中で堪忍袋の緒が切れる音がした。

いや、先程もうとつくなれていたが、千冬先生の話の間に辛うじて少し直つたのだが、それさえも見事に切られた。

「あんたさ——」

と、忍が声を出そうとするが、それは一夏の一言によつて遮られた。

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なつ……!?」

「一夏……？」

「悪い、忍。俺も我慢ならん。ここは、俺に言わせてくれ」

「う、うん……分かった。ここは一夏に任せる。ただし、一夏か僕が勝つたら代表 자체は一夏に任せる。それで良い?」

「ああ、分かつた。……は?」

「ふつふーん、言質取ったよ?」

「あ、ああ、分かつた……」

「あつ、あ、あなたねえ! わたくしの祖国を侮辱しますの!!?」

「お前も俺の国を侮辱しただろ、お互い様だ!」

「ついでに言うなら、僕らの国にいながらその僕らの国を馬鹿にしてるよね。というかこれ2回目だよ? 指摘したの。さつきも同じことを繰り返し言つたし。エリート様は何も学習しないのな。ああ、そうか。自分は他の人より偉いと考えるタイプのエリートだもんねあんた。そりやあ下々の人の言葉なんて馬の耳に念仏だろうな。悪かつたね

気付かなくて」

これにはエリート様もおかんむりらしく、下を向き、小さくプルプル震えている。
そして、突然顔を上げ、バンッと机を叩き、こう告げた。

「決闘ですわ！」

その提案に一夏と忍も乗る。

「おおいいぜ。四の五のいうより分かりやすい」

「僕も異論はない。分からず屋なエリートさんにはお灸を据えないといけないし」

「貴方いちいち癪に触る言い方しますわね：言つておきますけど、わざと負けたらわたくしの小間使い——いえ、奴隸にしてさしあげますわよ」

「悔るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「同じく。時代遅れとはいえ、きちんと専用機もある。舐めないことだ」

「時代遅れ？ 第二世代を改良したISかしら？ まあとにかく、イギリス代表候補生、セシリ亞・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

「ここで一夏が思いついたように口を開く。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺はどのくらい付ければいいのかなど……」

自分にハンデを付けようとする一夏に忍はこうツッコミを入れる。

「いや、一夏、多分セシリヤはＩＳでの決闘をする。今の女が素手で河原で殴り合う戦う
わけないだろ」

「あ、ああ、そうか。今の女子にはＩＳがあるもんな。失念してた。……じゃあ、ハンデ
はいい」

「ええ、そうでしようそうでしよう。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷
うくらいですわ」

これに忍はイラつときたらしく、

「無くていいと言ったよ？ 一夏なら男は言つたことは曲げないって言うだろうし。僕は
曲がるかもだけど、それでも今回は一夏に賛成。僕も無くていい」

「流石忍、俺のこと、結構分かつてくれるんだな」

「ずっと一緒に暮らしてるし、一夏は変なところで男ぶるしね」

忍がそう言うと、一部の女子がざわついてる。

「え…？ 白波くんと織斑くんが同棲？」

「やだ、それって…」

「夜には男と男の禁断の関係が…」

と、おぞましいことをヒソヒソと話している。

「あるわけないでしょ。僕らは至つて普通。ただ僕は女性が信じることが出来ないだけだ」

忍はここで、ハツとした表情を浮かべる。

女性が敵だらけにしたくないからあんな自己紹介をしたのに、これでは台無しだ。
「えへ、なんで～？」

「教えて～！」

と、女子たちが聞いてくる。

「……言えない」

「えへ？ なんで～？」

「教えてくれてもいいじゃ～ん」

「ぶーぶー」

そんな声が忍に飛んでくる。

「人には言えないことの一つや二つあるって、誰か言つてなかつた？」

忍がそう言うと、女子たちは自分の言動に反省の色を見せる。

「た、確かに……」

「ご、ごめんね、変なこと聞いて……」

「私もごめんなさい。深入りしない約束だつたもんね。白波くんか織斑くんのうちどち

らかが勝てば代表自体は織斑くんに決まっちゃうけど、一度クラス代表に立候補してくれたし、その約束は守らなきやね」

女子たちは分かつてくれたみたいだ。

「ごめんなさいね」

忍が申し訳なさそうな表情をすると、

「いやいや、気にしないで！」

「私たちも約束忘れてたし…」

「そうそう！」

女子たちは許してくれたみたいだ。

(あまり悪く考えすぎても悪いか…話しかけたら軽く話す程度はするか)

忍はこの時そう思つた。

「さて、話は纏まつたな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、そして白波はそれぞれ用意しておくよう。それでは授業を始める」

パンつと手を叩き、話を締める千冬先生。

忍たちは、それぞれ席に着き、教科書を開いた。

——廊下、自販機前——

「はあ～～：初日からストレスマックス～～」

『特にあのセシリアとかいう生徒さんはマスターの嫌うタイプですしね……』

「そうだな～～慣れようとしても、あのままだと、多分無理かな～～」

忍とアルヴィトが会話をしている時に、山田先生が声をかけてくる。

「あ、白波くん！探しましたよ！」

「山田先生、何かご用ですか？」

忍がそう聞き返すと、山田先生はこう言つた。

「はい！白波くんと織斑くんの寮室が決まつたんです！」

「やつぱり男子生徒同士、おんなじ部屋なんですね」

「はい！女の子と一緒にやなくて残念でしたか」

少しからかうようにそう笑う山田先生。

「いえ、逆にありがたいです。さつきも教室で言いましたけど、僕はある事情から女性を信じることが出来ないだけですから」

「そ、そうですか……？まあ、悩みがあつたらなんでも相談してくださいね、私、これでも先生ですか～～！」

えっへんと言わんばかりに胸を張る山田先生。

(少し子供っぽい雰囲気あるよね、山田先生って)

『ふふつ、確かにそうですね、マスター』

忍とアルヴィットが脳内会話をしながら山田先生の後を歩いていると部屋に到着した
ようだ。

山田先生が大きく手を広げ、忍の方を向く。

「さあ、着きましたよ！ここが白波くんの部屋です！」

「……1025号室、ですね、ありがとうございます」

「えっと、それじゃあ私は会議に戻りますね」

「……あつ、そういうえば山田先生、僕の同居人になる一夏は？放課後の補習があつたん
じや……」

「ああ、それは織斑先生にお任せしました！あの人なら多分大丈夫かと思ひます！」

「そうですか。なら安心です。（なんやかんや、千冬さんも一夏が心配なんだなあ）」

「それじゃあ私は行きますね。それでは！」

「はい、ありがとうございました」

そして、山田先生は去つていった。

忍は1025号室の鍵を開ける。

「うわあ…!!?」

そこにはまるでホテルのような風景が広がっていた。

大きなベッドが二つ。

キッチンに冷蔵庫。

しかもパソコンが二台。

そしてなんとシャワー室もある。

「……」

《マスター…？》

「すっごーい！何これ！ホテルみたい！これなら、学食に行く必要もない！1人で弁当作れる！」

そして、忍は袋から、モコモコで、手の平サイズの小さなぬいぐるみを取り出した。

「ふふ、これで誰にも気にされることなくぬいぐるみに囲まれて寝ることができる…!!

？ああ…幸せ…

《マスターは本当にそのぬいぐるみが好きですね。一夏さんにもそれは見せてないのでしよう？》

アルヴィートが興奮からか独り言を呟く忍にそう話しかける。

「まあ、趣味自体はバラしているんだけどね。誰にも言わないつて約束したけど」

《そなんですね》

「さて、シャワー浴びるか！」

シャワーを浴び終わり、数時間、昼寝ならぬ夕寝をしていた忍は突如、付いた部屋の明かりで目を醒ました。

「ん……んんつ……」

「ああ、すまないな、忍。起こしちまつたか？」

忍は目をこすりながら、そう言つてきた同居人……一夏の顔をベッドから見上げる。

「あ、一夏…おかえり！」

「おう……つて、なんだそのベッド？」

「えつ？ 僕ぬいぐるみ好きだつて言つてたよね？」

「聞いた……聞いたし、小学生の頃ぬいぐるみ抱いて寝てたのも覚えてるけど……中学校からは違う部屋だつたからな……」

一夏は歯切れ悪くもこう呟く。

「忍…ぬいぐるみ、そんなに持つてたのか……」

「えつ？ 10体くらい普通じやないの？」

忍のその答えに一夏は頭を抱えていた……。

第2話 不和（ディファレンス）（1）

朝八時、一年生寮の食堂。

誰もが朝食をとりにここに来る時間。
そこに、三人の姿があつた。

「なあ……」

「……」

「なあつて、なんで怒つてるんだよ」

「……怒つてなどいない」

「顔が不機嫌そうだよ、筈」

「生まれつきだ」

「……ごめん」

「忍が謝ることではない」

「……そう」

一夏、筈、忍の三人だ。

ちなみに、忍は一夏の左隣、筈は一夏の右隣に座っている。

忍は一見女の子に見えなくない外見なので、忍が女性用の制服を着ていたら両手に花状態だったかもしれない。

この三人は『幼馴染だから』という理由で席についているが、忍は――
 （土曜日までは食材買えないし、当分朝昼はここになるのかあ……。早く土曜日来ないかなあ）

と、そう思つてゐる。

ちなみに一夏と箒のメニューは和食セット。

メニューの内容は、ご飯に納豆、鮭の切り身と味噌汁、そして浅漬け。これがとても美味しいらしい。

ただし、忍はご飯とふりかけ、卵焼きと味噌汁のセットを頼んだ。

ちなみに一夏、箒の味噌汁の味噌は赤味噌、忍の味噌汁は合わせ味噌だ。

忍曰く「赤味噌はちょっとしょっぱい、合わせ味噌がちょうどいい」らしい。

そのため一夏とたまに赤味噌か合わせ味噌、どつちが美味しいかでちょっとした口喧嘩になつたこともある。

今となつては笑い話だと二人は思つてゐる。

「箒、これうまいな」

そう一夏が箒に話を振るが――

「…………」

篝はそれを無視した。

しかし篝も同じように美味しいと思つてゐるのか、鮭をつまんでゐる。

「なあ、篝。俺なんか悪いことしたか？怒つてる理由が検討もつかんのだが……」

一夏はそう、篝に尋ねてみる。しかしそう……

「だから、怒つていないと言つてゐる」

篝はその一点張りだった。

篝は「怒つていない」と言つてはいるが、一夏に顔を向けもしない。どうみても明らかに不機嫌だ。

（怒つてるのか恥ずかしがつてるのか……）

と、忍は勝手に悩んでいた。

ちなみに、この時篝が怒つていたのは、自分の恋心に気付かない一夏の鈍感さと、その気持ちを表に出さない自分の弱さに対する苛立ちからくるものであつた。

「ねえねえ、あの二人が噂の男子だつて！」

「なんでも織斑くんはあの千冬様の弟らしいわよ、しかも白波くんはその織斑くんと同棲してたつて」

「えー、三人揃つてＩＳ操縦者かあ。やつぱり二人とも強いのかな？」

この目線も昨日から変わらない。

「興味津々だけどがつつきませんよ」という感じのむず痒い気配の包囲網。

忍はこの目線に一週間耐えられるのか不安になつた。

「だから筈——」

「な、名前で呼ぶなつ！」

「……し、篠ノ之さん」

「…………」

名前で呼ぶなと言われたからか、一夏が名字で呼んだら、筈はまたむすつとしてしまつた。

この名字も訳ありで、筈にとつては忌々しい名字なのだろう。

そんなギスギスした雰囲気が漂い始めた時、一人の女子に声をかけられた。

「お…織斑くん、白波くん、同席…していいかな？」

「へ？」

急に声をかけられたからか変な声を出した一夏が見ると、そこには朝食のトレーを

持つた女子が三人、一夏の反応を待ちわびるが如く立っていた。

「ああ、俺は別にいいぞ。忍は？」

一夏が忍にそう尋ねると、忍もこう許可を出す。

「……僕も構わない。ただし、あまり声は張り上げないでくれ」

すると、声をかけた女子は安堵の息を漏らし、後ろの二人は小さくガツツポーズした。

周りから妙なざわめきを感じる。

「ああ～つ、私も早く声かけておけばよかつた……」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよ」

「なんですか？」

（……ああ、確かに一年が八名、二年が十五名、三年が二十二名自己紹介に来たんだつけ。一夏がそう言つてた。安眠妨害されたよ……。幸い一夏がドアの前に出て、ドアを閉めてくれて幸いしたけど……。おかげでぬいぐるみはまだバレていないみたい。本当に一夏には感謝だよ）

《マスター、あの時視線で人を殺せそうな目をしてましたからね》

（そこまでだつたかなあ～…）

《間違いなく》

忍とアルヴィートと脳内会話していると、女子三人は事前に打ち合わせでもしていたかのように席についていた。

窓際に一夏、筈、忍。

空いている席が全て埋まる。

(忍がいてくれて比較的楽だわ……)

「夏はこの時そう思つた。

「うわあ、織斑くんたちつて朝すぐ食べるんだ」

「男の子だねっ！」

「俺は夜少なめに取る方だから、朝たくさん食べないと色々きついんだよ」

「僕もそれに倣つて。確か千冬さんのを真似たんだつけ？」

「忍、それを言うなよ……つていうか、女子つて朝それだけで平気なのかな？」

三人の朝食は、種類こそ違うが、パン一枚、飲み物一杯、おかず一皿（少なめ）だけだつた。

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平氣かなつ？」

二人の女子はそう言う。

(なるほど、ダイエットかな？女子の体型維持つて大変)

などと忍がそう思つていると、最後の黄色いフードを被つてる女子が予想外の発言をした。

「お菓子よく食べるし！」

（ええ……食べすぎてお菓子が主食にならなければいいけど）

などと、忍は心の中で彼女の将来を不安視した。

「……織斑、白波。私は先に行くぞ」

「ん？……ああ！また後でな」

「了解」

食事を済ませた箒は席を立つて行つた。

（しかし箒と同じクラスとはな。まあ、周りがみんな面識のない女子よりはいいか）

一夏はそう思つた。

一夏、箒、忍は幼馴染だ。

小学校一年の時に千冬の付き合いで剣道場に通うことになつてから、四年生まで同じ
クラスだつた。

両親のいない千冬、一夏、忍はよく篠ノ之夫妻に夕食に招いてもらつた。

織斑家はあまりお金がなく、貧乏だったので大いに助かつた。

ただ、箒と一夏はあまり仲が良くなく、むしろ悪かつた。

それがなんであんな風になつたかと言うと、

『男女』と言われていじめられていた箒を一夏が助けたからだ。

篠と忍の関係は、悪くはない。どこにでもいる普通の友達同士という感じだ。

……恐らく忍もいじめを受けていたから、という点もあるにはあるが。

(……あんまり覚えてないんだよな、昔のこと。まあみんなそなうなんだろ。昔は昔。今は今だ)

一夏はそう思つた。

「織斑くんつて、篠ノ之さんと仲良いの？」

「ああ……まあ、幼馴染だし」

一夏がそういうと、周りがどよめきだす。

「え、それじゃあー」

隣の女子（谷本さんというらしい）が、質問をしようとしたところで、突然手を叩く音が食堂に響いた。

「いつまで食べている！食事は迅速に効率良く取れ！遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

その千冬先生の声を聞いた途端、食堂の全員が慌てて朝食の続きを入った。

忍は食べ終わつたらしく、トレーを返却口に置き、教室に戻つて行つた。

このＩＳ学園、一周が五キロもある。

十周もするとなると、授業を受けても頭に入らないだろう。

一夏も急いで食事を始めた。

ちなみに千冬先生は、一年生の寮長も務めているらしい。
いつ休んでいるのか分からぬ。

だが、一夏は千冬先生にタフネスで勝つことがないので、恐らく大丈夫だろう。

（まあ、今はあまり考えずにISの勉強に集中しなきやな、来週にはあのセシリアとの対戦もある。なんとかISの操縦をものにしなきやな。……まあ、なんとかなるだろ）

一夏はそう楽観視した。

第2話・不和（デイフアレンス）（2）

一組の教室。

二時間目が終わり、一夏は死にかけていた。

（一夏…土台無しでここへ放り込まれたばかりに……）

忍がそう思つていると、後ろから一人の女子生徒に声を掛けられた。

「ねえねえ、しのぶー」

忍が声のした方を向くと、一緒に朝食を食べたフードを被つていた少女（布仮本音といいうらしい）が、申し訳なさそうにそこに立つっていた。

「どうしたの？」

「教科書忘れちゃつたんだ…見せてくれないかなー」

「……分かつた。そういうえば貴方隣だつたもんね。いいよ」

「ありがとうー！」

申し訳なさそうにねだる本音に、忍は数秒の逡巡しゅんじゅんの後、教科書を見せるこことを肯定す

る。

それを聞いた本音は嬉しそうな声で感謝を述べ、笑顔を見せた。

そして、三時間目の始まるチャイムが鳴った。

「——というわけで、ISは宇宙での作業を想定されて作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギー・バリアで包んでいます。また、生体機能も補助する役割があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態に保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ——」

（ん？ なら、なんでISには剣とか銃とかの武器があるの？ 宇宙での作業にはあまり必要性は感じないけどなあ…）

忍は、この時そう感じたが、それについて質問しようとまでは思わなかつた。

「先生、それって大丈夫なんですか？ なんか、体の中をいじられてるみたいでちょっと怖いんですけども……」

クラスメイトの一人が、やや不安げに先生の先ほどの説明に対し尋ねる。

「そんなこと無いですよ。そうですね、例えば皆さんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、人体に悪影響を及ぼすなんて言うことはないわけです。まあ、自分に合つたサイズのものを選ばないと、型崩れしてしまいますが…」

（それ男子がいる中でする話じゃないですよ山田先生…いや、去年まで実質女子校だつたもんね、そもそも仕方ないか）

忍は心の中でそう思つた。

ふと、一夏と山田先生の目が合う。

しばらくすると、山田先生は顔を赤くし、

「あ、えつと、織斑君たちはしていませんよね。わ、分かるわけないですよね、この例え……あは、あははは……」

山田先生のこの一言で女子が意識したようで、腕組みをして胸を隠そうとしていた。
それを見て、

(いや、確かに男は狼と言うけどさあ……)

(千冬姉の下着いっつも洗濯してたから今更女子の下着でどうこう騒いだりしないぞ
……)

二人は心の中でそう呟いた。

だが、なんだかむず痒い気配がする。

見せたいけど見せたくないと言う感じの気配。

なんだか落ち着かない。

この雰囲気はとても長く感じられた。

忍がふと、隣の本音を見ると、本音は深くフードを被り、俯いて教科書を見ていた。
……が、その視線はこつそりと忍を見ているようにも感じられる。

フードに隠れた顔も少し赤面しているように見えた。

そんな時、

「んんっ！山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ」

千冬先生がこの雰囲気を咳払い霧散させた。

千冬先生に促されて、山田先生も話の続きを戻った。

「そ、それともう一つ大事なことは、ISにも意識に似たようなものがあり—つまり、一緒に過ごした時間で分かり合うといいますか、ええと、操縦時間に比例して、IS側も操縦の特徴を理解しようとします。それによつて相互的に理解し、より性能を引き出せることになるわけです。ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

そう山田先生が説明を終えると、すかさずクラスメイトの一人が挙手した。

「先生、それって彼氏彼女のような感じですかー？」

「そ、それは…どうでしよう…。私には恋愛経験なんてないので分かりませんけど…」

そう言つて、恥ずかしがりながら俯く山田先生を尻目に女子が男女に対する雑談を始めていた。

その時、忍は山田先生が自分と一夏に助けを求めるような視線をチラチラ送つてゐるこ

とに気づいた。

「……」

「……よし、分かりました。ISがパートナーというのは彼氏彼女みたいな関係なのか
という話でしたよね」

「は、はいっ」

忍は山田先生に話の内容を確認すると、席を立つた。

「男女の関係と言わると違うかな。無力な僕の力になつてくれた存在。共に戦つてい
く相棒。僕はそんな認識でいます」

《マスター…》

そう忍が意見を言うと、周りからは感心の声が聞こえる。

と同時に、三時間目終了のチャイムが響く。

「あつ。次の時間では空中におけるIS基本静動をやりますからね」

この学園では基本担任がすべての授業を持つ。

休み時間十五分の為に職員室に戻らないといけないとなると、相当な苦労だ。

「ねえねえ、織斑君さあ！」

「はいはーい、質問質問！」

「今日のお昼暇？放課後暇？夜は暇？」

昨日の様子見は終わつたのか、先生方が教室を出るなり女子の大半が一夏の席に詰めかかる。

（最後の女子の人、夜遊びはほどほどにしどきなよ）

忍は心の中でそう呟いた。

「いや、一度に訊かれても……」

そう言つて一人ずつ訊こうとした一夏だが、何やら整理券を配つている女子がいることに気付いた。

しかも有料で。

（商売をするな商売を……）

一夏は心の中でそう呟く。

そんな中、忍は、

「ありがとう、助かったよー」

「今度からは気をつけてね」

「うん。気をつけるよー」

本音に教科書を返してもらつていた。

（忍のところが平和すぎる……）

一夏は先日の約束のためか、質問攻めに遭わない忍を羨ましく思つた。

「…………」

一夏を囲む集団を、箒が少し離れた位置から見ていた。相変わらず怒つているように見える。

まだ昨日のことを引きずつてゐるようだ。

(しかし参つた。箒に I S のこと教えてもらおうと思つたが……こりや夜に訊きに行くしかないか……)

そんなことを一夏が思つてゐる最中でも、女子の『早く質問に答えて』という視線が一夏に刺さる。

今の一夏は、針のむしろに座らされたような状態だった。

「千冬お姉様つて自宅ではどんな感じなの!?!?」

それは忍に聞いてもいいだろ、と思いつつも、断ると仲が悪くなる可能性が高いので答える。

「え。案外だらしな…………」

一夏が千冬の自宅での過ごし方を言おうとすると、

「パンツ!!?」

という、叩かれる感覚と音に止められた。

いつの間にか、背後に千冬先生が立っていた。

「休み時間は終わりだ。散れ」

タイミングが良すぎる登場に、本当はこつそり聞いていたのではないか、と一夏は勘繰った。

「織斑。お前のISだが、準備まで時間がかかる」

「へ？」

「一夏が間抜けな声を出す。自分のISがあるというのがどれだけのことか理解しないらしい。

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

〔××〕

混乱している一夏を差し置いて、教室中がざわめく。

「せ、専用機!!? 一年の、しかもこの時期に!!?」

「つまりそれって政府からの支援が出てるつてことで……」

「ああ。いいなあ……。私も早く専用機ほしいなあ」

騒ぐ女子たちの中で、忍は不快感を覚えていた。

（驚く気持ちも分かるけど、あまり騒がないでくれ……鼓膜破れそう……）

『マスター、大丈夫ですか？』

(大丈夫じゃないです)

『ですよね……』

忍がアルヴィットと脳内会話していると、千冬先生が一夏を見るに堪えかねたのか、

「はあ……教科書六ページ。音読しろ」

千冬先生が、一夏にこう指示を出す。

「え、えーと……『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを製造する技術は一切開示されていません。現在世界中にあるIS467機、その全てのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作成できない状況にあります。しかし博士はコアを一定数より多く作成することを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に接触し、すべての状況下で禁止されています』……」「つまりそういうことだ。本来なら、IS専用機は国家、或いは企業に所属する人間にしか与えられない。しかし、お前は状況が状況なので、データの収集を目的とした専用機が用意されることとなつた。理解できたか？」

「なんとなく……ん？ 千冬姉……」

「織斑先生だ」

「……織斑先生、じゃあ忍はどうなんですか？あいつ、どこにも所属してませんよね？」
「一応、倉持技研の所属ということになつていてる。あいつのＩＳの名前が元々は未設定
だつたのが幸いしたな……」

そこまで言つて、千冬先生がハツとした表情を浮かべたが、既に遅かつたようで、周り
がザワザワとし始める。

「……未設定？」

「どういうことなんだろう……」

「どんでもない事情があるのかなあ」

少し動搖した様子を見せつつも千冬先生がこう強く言う。

「静かにしろ。今は授業中だ」

すると教室はあつという間に静かになつた。

それに安心したのか、千冬先生はため息を漏らす。
と、その時を見計らつてか、

「先生、あの、篠ノ之さんって、もしかして……」

そう言つて、女子の一人が千冬先生に質問した。

——篠ノ之 束。たばね

ISを作った稀代の天才。

千冬の同級生であり、篠の実姉もある。

今は行方不明であり、超國家法に基づき手配中の身である。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

篠の個人情報をあつさりバラす千冬先生。

（オイ、個人情報バラしていいのか教師。まあ、本人はそんなことどうでもいいんだろうな……）

一夏は心の中でそう呟いた。

「ええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が二人もいて、さらにその居候の人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人？やつぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だつたりする！？今度ISの操縦教えてよつ」
授業中にもかかわらず、教室中が騒ぎ出す。

（あれ？ 篠ってIS使つたことあつたつけ？）

と、一夏は記憶内を探し始めたが、

「あの人には関係ない！」

という大声に中断させられた。

見ると、全員驚愕の表情を浮かべており、何が起こったのか分からぬ様子だつた。

「……大声を張り上げてすまない。だが、私はあの人じやない。教えられるようなことは何もない」

そう言うと、箒は窓の方を向いてしまつた。

女子は盛り上がつたところに水を差されたような気分になつたようで、それぞれ困惑や不快を顔にして戻つていつた。

（天才を家族に持つた人は、やっぱりその人との差に苦しめられるんだな）

忍は一人そう思い、

（箒と東さんつて仲悪かつたかな？……ダメだ。あの二人が一緒にいた覚えがない）

一夏は過去の記憶を探つていた。

「さて、授業を始める。山田先生、号令を」

「は、はいっ！」

山田先生は箒が心配な様子だつたが、その思考を切り捨てて、授業を開始した。

（あとで箒に話を聞くか……）

一夏はそう考え、教科書を開いた。

第2話 不和（デイフアレンス）（3）

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思つていなかつたでしようけど」
休み時間、早速一夏の席にやつてくるセシリ亞。

（……腰に手を当てて何になるのか。腰辛いのかなあ）

忍はセシリ亞のポーズを見て、そんなくだらないことを考えていた。

「まあ、勝負は見えてますが、流石にフェアじやありませんものね」

（……その余裕が、いずれ身を滅ぼさないといいけどね）

余裕ぶるセシリ亞を見て、忍は心の中で警鐘を鳴らす。

「……なんで？」

一夏には、何故自分に専用機があることがフェアなのか分からぬようだ。

「あら、ご存知ないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げますわ。このわたくし、セシリ亞・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持つていますの」

「専用機は、量産型や訓練機よりもスペックが高かつたり、その機体だけの特殊能力があつたりするんだ。まあその特殊能力は、条件を満たした後じやないと使えないんだけど

どね……。そして、専用機はその人の特徴に合つたものが用意されるんだ。だから、一夏が特徴をフルに活かせないであろう訓練機じやあ、フエアじやないんだろうな。と言つても、戦闘データが取れてない一夏の実力は未知数だから、どんな専用機が来るのかはわからないけど」

少しでも一夏に分かりやすくなるようにと思い、忍はセシリリアの解説に専用機の簡単な説明を付け加えた。

「へー……」

一夏が声を漏らす。

「……よく分からなかつたかな？ごめんね。僕、人に教えるのは苦手でさ」

「いや、忍の説明のおかげで多少分かつた。サンキュー、忍」

「僕の説明が、少しでも専用機のことを理解するための参考になつたのなら幸いだよ」

忍と一夏が友人らしさを感じる会話ををしていると、

「……ほん！」

セシリリアが咳払いをした。

「あなたの方の友情は素晴らしいですわね。ですが、話を戻させていただきますわ。先ほど貴方が教科書で読んだ通り、世界で I-S は四百六十七機。つまり、その中でも専用機を持つ者は全人類六十億人超の中でもエリート中のエリートなのですわ！」

セシリ亞が脱線した話を戻し、解説を続けた。

「そ、そうなのか…」

一夏が驚愕の声を上げる。

「そうですわ」

セシリ亞が肯定する。

が、

「人類つて今六十億超えてたのか……」

そんな的外れな一夏の発言に、忍はずつこけた。

「そこは重要ではないでしようり?」

そう言つてセシリ亞が一夏の席の机を叩く。

一夏の席に積まれてあつた教科書やノートが落ちる。

「あなた……馬鹿にしてますのり?」

「いや、してない」

「……まあいいですわ。今のわたくしは他にやりたいこともありますし」

そう言うと、セシリ亞は、箒の席に歩いていくと、

「そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですかってね」

と、箒に束の話題を振つた。

案の定、筈は鋭い視線をセシリ亞に返す。

「妹というだけだ」

「う……」

声を詰まらせると、セシリ亞は一步下がった。

（ああ：筈にその話題はタブーって、さつきの会話で分からなかつたのかな）

『文化が違うと、察するというのは難しいのかかもしれませんね』

忍とアルヴィートが脳内会話で陰口を言う。

そんなことは知る由もなく、

「ま、まあ。どちらにしてもこのクラス代表に相応しいのはこのわたくし、セシリ亞・オルコットであることをお忘れなく」

セシリ亞は少し動搖しつつも、自信満々な態度を崩さずにそう言い放ち、立ち去つていつた。

「筈」「……」

「お昼休み、一夏は筈に話しかけるが、筈は反応しない。
〔篠ノ之さん、飯食いに行こうぜ〕」

一夏は箸を気にかけているようだ。

(人のことには敏感なのに、自分のことに関しては全く気づかないよね、一夏つて
『どうしたらあんな性格になるんでしょうね……』)

(……分からん)

《ですね……》

二人が脳内会話してると、

「他に誰か一緒に行かないか？」

一夏が他に一緒に昼食を食べる人を募集していた。

すると、

「はいはい、はいっ！」

「行くよー。ちょっと待つてー」

「お弁当作ってるけど行きます！」

本音たち三人組が手を挙げて、自分たちが行きたい、という意思を示した。

そんな中、忍は、

(えつ？うそ、お弁当作れるの？待つて、じゃあ僕は勝手に弁当の食材を買いに行けない
と思い込んでただけ？)

弁当が作れるという事実を知り、心の中で狼狽えていた。

「……私は、いい」

肝心の箸は誘いを断つた。

が、

「まあそう言うなつて。ほら、立て立て。行くぞ」

そう言つて、一夏は強引に箸の腕を組み、箸を立たせようとした。

「お、おいつ、私は行かないと言つて——う、腕を組むなつ！」

当たり前だが箸は嫌がる。

だが、一夏はやめない。

「なんだよ、歩きたくないのか？おんぶしてやろうか？」

一夏は相手が幼馴染だからか、軽々しくそう言つた。

「なつ……!?」お、お前は他人の目線は気にならんのか!!?」

「お前が頑なに他の誰かと一緒にになるのを拒むからだろ。ほら、行こうぜ」
一夏はそのまま箸の腕を引き、食堂へ向かおうとする。

「は、離せっ!!?」

「学食に着いたらな」

箸は嫌がるが、一夏は聞こうともしない。
が、それがいけなかつた。

「い、今離せっ！ええい、こうなつたら——」

筈がそう言うと、一夏が筈に絡ませた腕が、肘を中心^{シキン}に曲がった。

気付けば一夏は、床の上に投げ飛ばされていた。

(一夏……年頃の女子に馴れ馴れしく触るから……)

忍は、心中で一夏を憐れんだ。

「はあ……はあ……はあ……」

「腕上げたなあ」

一夏は呑氣に言つた。

「ふ、ふん。お前が弱くなつただけではないか？こんなものは剣術のおまけだ」

「まあ一夏はずつと家事に勤しんでたからね。弱くなつてたり忘れてるのは許してあげて。かく言う僕もそうだけど……」

「そ、そうか……なら仕方ない。だが、武術はISでの戦闘の助けになると思う。お前たちも鍛え直しておくといい」

「うん、そうする。ありがとう、筈」

「まあ、これも幼馴染である私の役目だ」

忍と筈が幼馴染らしく会話している横で、

（古武術をついでで覚える女子は世界でお前くらいだと思うぞ筈……）

一夏は立ち上がり、心の中でそう呟いた。

「え、えーっと……」

「私たち、お邪魔みたいだし、やつぱり……」

「え、遠慮しとこうかなー……」

先程誘いに乗つてくれた本音たちが下がろうとする。

「あ、おい、待つてくれ！折角だし、みんなで食べようぜ、な？」

一夏がそう言って引き留める。

「ま、まあ、織斑君がそう言うなら……」

「わかったー！」

「お弁当無駄になっちゃつたけど、織斑くんと一緒にご飯を食べられるならいいつか！」

そう言つて三人は戻つて来た。

「じゃあ筈、行こうぜ」

「な、名前で呼ぶなど——」

「いいから行くぞ」

そう言つて、一夏はまた強引に筈の手を引く。

「お、おい一夏。いい加減に……」

「黙つてついてこい」

「し、忍！なんとかしてくれ！」

「やだ。なんとかしても筈に怒られそうだし」

「薄情者オオオオ!!?」

教室に筈の叫びが響いた。

学食に六人が着くと、

「筈、何でもいいよな。お前、何でも食うし」

一夏がそう言った。

「ひ、人を犬猫のように言うな。私にも好みがある」

「そうだぞ。僕が合わせ味噌が好きなように人にはみんな好き嫌いがあるものだ」

「そ、そうだな……。あ、日替わり二枚買ったからこれでいいよな。鯖の塩焼き定食だつてよ。忍もいるか？」

「ありがたいけど遠慮しどく。他の三人に渡してあげて」

「お、おう……任せとけ」

「織斑くんの奢りは嬉しいけど……やつぱり私、自分で買うよ」

「私も遠慮しておくね。やつぱりお弁当食べたいし」

「私もいいよー。お菓子あるし！」

「話を聞いているのか一夏！」

そう言つて、筈が一夏に怒る。

「聞いてねえよ。俺がさつきまでどんだけ穏和に接してやつてたと思つて——」

台詞を言い終わる前に、忍が一夏の頬を叩いた。

周りの視線が、一斉に忍と一夏に刺さる。

「な、何するんだよ忍！」

「してやつてるとか、偉そうな態度をとるのはよしなよ一夏。筈は君の大切な幼馴染だろ？なら大切にしなきや。友達にそんな態度をとつてたら嫌われるよ。僕もそんな態度をとる一夏は嫌い」

そう言つて、忍は食券を購入し、並んだ。

「……悪かった、筈」

「いや、その…私も悪かった。好意を無下にするような真似をして……すまない」

「お、おう……まあ、その……俺は頼まれたからってこんなことは普通しないんだ。幼馴染の筈だからこんなことやれるんだ」

一夏は頬を搔き、目を逸らしながらそう言つた。

「ふふつ、なんだそれは……おかしな一夏だ」

「うーん……そこまでおかしいか？普通だと思うけどなあ……」

そのやり取りを見ていたみんなの視線が和らいでいく。

忍も、学食のざるそばといなり寿司を持ちながら、二人を見て微笑んでいる。

「一夏」

「おう、なんだ？・箒」

「……そ、その……ありが……」

箒がそう言おうとした時、

「はい、日替わり二つお待ち！」

学食のおばちゃんの声に遮られた。

「ありがとう、おばちゃん。おお、美味そうだ！」

「美味そう、じやなくて美味いんだよ」

そう言つて、学食のおばちゃんはニッと笑つた。

「おーい、一夏、箒！みんなも！こっちだよ」

席を先に確保した忍はそう言つて、五人に手を振る。

一夏と箒が座つたしばらく後、本音たちも同じテーブルに座つた。

ちなみに、並び順は、癒子、さゆか、本音、忍、箒、一夏といった順番だ。

「そういやさあ」

「なんだ、一夏」

「一夏が箸に話題を振り、それに箸は、味噌汁を啜りながら返事をした。

「I-Sのこと教えてくれないか?」このままじや来週の試合、何も出来ずに負けそうだ」「あんなくだらない挑発に乗らなければ、そんなこと考える必要なかつたろうに……」

「そう言つて箸はまた味噌汁を啜る。

「まあ、篠ノ之さんの言う通りだよね……」

「ま、まあまあ、織斑くんも専用機とか知らなかつたわけだし」「しのぶーの話によると手違いでここに来ちやつたんだつてー」「えつ、それつて本当に!?!?」

本音たちはその話で盛り上がる。

「そこをなんとか、頼む!」

一夏が箸を持ったまま、手を合わせ、箸に頭を下げる。

「一夏、その前に箸置きなさい」

「はい……」

忍に促され、一夏は箸を置く。

その時、

「ねえ、君たちつて噂の子でしょ？」

いきなり、声をかけられる。

声をかけられた方をみんなが向くと、三年生らしき女子が立っていた。
学年の違いは、制服のリボンの色で判別できる。

一年が青、二年が黄色、三年が赤だ。

「はあ、多分」

一夏が返事をすると、先輩は一夏の隣の席にかけ、若干傾けた顔を一夏に向ける。

「代表候補生の子と戦うつて聞いたけど、ほんと？」

「はい、そうですけど」

「まあ、そうですね」

「噂つて広がるの速いね……」

「女の子は噂好きだしね」

「うーん……でも私は噂、あまり好きじゃないかもー……」

三人が小声でそう話す。

「でも君たちつて素人だよね？ I S 稼働時間いくつくらい？」

そう聞かれて、

「いくつって……二〇分くらいだと思いますけど」

と、一夏は言い、

「うーん……初めて起動したのが五歳だから……大体十一年くらいになりますかね。正確には分からないんですけど……時間に直して、一日2時間稼働させてると仮定して……一九二七二〇時間くらいでしようか」

そう言つた瞬間、周りが驚愕の色に染まる。

「え、白波くん……十一年つて……？」

「ちょっと長すぎじゃない…………？」

「わたしたちが五歳の頃は……えっと…………」

本音たち三人も例に漏れず、ざわついている。

「え、えっと、そつちの子は、二〇分だつたわよね」

顔を引攣らせながらも、先輩は強引に話を戻す。

「え、ええ、まあ」

「それじゃあ無理よ。ISは稼働時間がものをいうの。その対戦相手は代表候補生なのよね？なら軽く三〇〇時間はやつてると思うわ。まあ、そこの子は……うん」

そう言つて、先輩は忍を少し引いているような目で見つめた。

「でさ、私が教えてあげよつか？ISのこと」

先輩は、少し冷や汗をかきながらも、一夏に顔を近づける。

「はい、ぜ——」

「一夏がそう言おうとした時、

「結構です。私が教えることになつていますので」

「箒が食事を続けながら、それを遮つた。

「あなたも一年でしょ？ 私の方が上手く教えられると思うなあ」

「……私は、箒ノ之束の妹ですから、他の人より多少は教えられると思います」
「言いたくないが、しかしここは譲れないとばかりに箒はそう言つた。

「箒ノ之つて——ええつり？？」

先輩はとても驚いた様子だつた。

I Sを作つた人の親族が目の前にいるともなれば、驚くのも無理はないだろう。

「ですでの、結構です」

箒はそう言つて、先輩の案をキツパリと断つた。

「そ、そ。それなら仕方ないわね……」

そう言うと、先輩は軽く引いた感じで去つていつた。

一夏は驚いた様子で、箒を見た。

「なんだ？ 私の顔に何か付いているのか？」

じつと見つめる一夏に、箒が聞く。

「なんだつて……その、教えてくれるのか？」

「お前から頼んだのだろう？ おかしなことを聞くのだな、一夏は」

そう言つて、箒は少し笑う。

「今日の放課後」

「ん？」

「剣道場に来い。一度、腕が鈍つてないか見てやる」

「いや、俺はISのことを——」

「ISで戦うなら、その前に武術を身につけておくべきだと私は思う。お前の専用機が

格闘特化の機体だとしたら大変だしな。……まあ、射撃特化の機体だったら、すまない」「……分かつた」

箒の意見にも一理ある。

一夏は、箒の意見に乗ることにした。

「織斑くん、頑張つて！」

「織斑くんなら、きっと強くなれるから！」

「おりむー、ふあいとー！」

本音たち三人も、一夏を応援する。

「おう、サンキュー！」

一夏は笑顔で応えた。

「……筈、よく東さんの妹って言う気になつたよね」

「一夏が他の人に取られるのが嫌だつたんだ……それで、先輩に優位に立てるのがこれ
しか無かつた……軽蔑するか？」

「いや、むしろそう思つて当然だと思うよ。恋する人は他の人に取られたくないってい
うのはみんな同じだろうしね」

「……／＼」

忍にそう言われ、筈は顔を赤らめた。

第2話 不和（ディファレンス）（4）

放課後 剣道場

「うーむ……」

「いてて……」

一夏と篝は、満載のギヤラリーの目線が刺さる中、先程まで剣を打ち合っていたのが、やはりというか、この三年間、まともに剣を握る機会が無かつたからか、一夏は一方的に篝に負け続けていた。

「まさかここまで弱くなつていたとはな……。部活は帰宅部だつたのか？」

「ああ。三年連続皆勤賞だ」

「一夏はずつとバイトしてたんだ。僕が行ければ良かつたんだけど、ＩＳの勉強しなきやいけなかつたから……」

「そ、そうなのかな……？ 一人とも大変だつたな」

「気遣つてくれてありがとう。ところで、一夏のことはいいの？」

「そうだな。一夏」

忍に促され、篝は一夏を呼ぶ。

「はい？」

「お前を鍛え直す。キツイことを言うが、I S以前の問題だ。バイトが大変で剣道が手につかなかつたことは理解したが、このままでは代表候補生を倒せるとは思えない。これから毎日、放課後三時間、お前がカンを取り戻すまで、私が稽古を付ける。いいな」「え……それはちょっと長いような……つていうかそれよりI Sのことくだな」「ダメだ。正直に言つて、I Sは後から感覚でどうとでもなる。なんというか、こう：シユバツという感じで」

そう言うと、筈は「また明日な」とだけ言い残し、更衣室に行つてしまつた。

「シユバツってなんだよ……忍、教えてくれ」

「僕も感覚で戦うタイプだから教えるのは無理。それより、トレーニング続けよう。こなんじや、自分を許せないでしょ。一夏」

「ああ、そうだな。ところで、俺は今筈のシユバツという言葉の意味を知りたいんだが……」

「多分移動とか、回避のことを指してるんだろうけど……僕にも分からぬ」「だよな……」

忍にそう言われると、一夏はがっくりと肩を落とした。

（少しキツく当たつてしまつただろうか……）

更衣室で剣道着から制服に着替えながら、篝は先程の自分の発言を少し悔やむ。

（……い、いやー…これもあいつのためだ！昔の一夏は……もつと強かつた……）

昔の一夏を思い出し、不安を振り払うと同時に篝の口元がほころぶ。

（あいつがISで戦えるようにする為に、明日からも頑張ろう……）

篝はそう意気込んだ。

（……そういえば、結局あいつの専用機つてどつち寄りなんだろう……？まあ、よく前に出るあいつのことだ、格闘特化だろうな。あいつがそれを扱いこなせるように、私も頑張つて稽古を付けなければな）

そして、小さく拳を握る。

（……それにしても、よく私と分かつたものだな）

意気込んだ篝はふと思つた事を心の中で呟きながら、頭に巻いた手拭いをほどいて、髪に触れる。

（あいつら、六年も経つていたのに……顔も、見た目も、あの頃とはまるで別物になつているのに）

それでも、一夏は筈を覚えていた。
忍も、しつかり覚えてくれていた。

「ふふつ」

そう思うと、嬉しくて、つい笑みが溢れてしまう。

筈が二人を一夏と忍だと分かったのは、単に二人の名前がTVで出ていて、その時に写真が出たからだ。

名前が出ていなければ分からぬくらい、幼馴染みの二人は男らしい顔つきになっていた。

いや、忍はそうでもなかつたが、あの時と比べ、目付きが鋭くなつていた。

——正直に言えば、格好いいと思つた。

特に一夏が。

名前を見て、飲み終わり、流しに持つて行こうとした湯呑みを落としてしまつたほどである。

(……一夏は、新聞で昨年の全国大会優勝を知つたと言つていた。だが、それは私の知る限り、端つこの記事であるはずだ。なのに、一夏は『すぐにわかつた』と言つてくれた。
……髪型を変えなかつた甲斐があつたな)

そう心の中で呟くと、筈は髪を弄る。

筈も十五歳の乙女。

恋をするのはなんら不思議ではない。

ふと、筈は鏡を見る。

「…………はつ！？」

鏡に映った自分の顔を見て、我に返る。

「…………」

筈は、平静さを取り戻す為に、鏡の中の自分を睨む。

すると、恋する乙女の目付きから、元の鋭い目付きに戻る。

（と、とにかく、明日の放課後から特訓だ。せめて人並みには扱つてもらわなくては……
それに……）

そこまで心の中で呟くと、筈は一つため息をつく。

（放課後、一夏と二人きりに、いや、忍も来るだろうから三人か。とにかく、一夏と一緒に
になれる口実が出来……）

そこまで心の中で呟き、筈ははつとした表情を浮かべる。

「い、いや！ そのようなことは一切考えてはいない！ 何も下心などない……私は純粋に、
同門の衰えを嘆いているだけだ。そして同門故に面倒を見てやる。それだけなんだ
……」

そう一人で口に出して言うと、篝は再びため息をついた。

「故に、正当だ！」

誰もいない広い更衣室に、篝の声が響き渡った。

「忍一、痒いところはないか？」

「もー、僕も十六歳だし、子供じやないよ！」

夕飯を食べ終わり、部屋に戻った一夏と忍は今、一人でシャワーを浴びていた。

「ほーう……そんなおませさんな子はこうだ！それっ！」

「わつ、ちよつ、やめつ、あははは!!？」

「はあ…はあ…参つたか！」

「あははは、あはつ……いやー、参つた参つた……降参だよ」

まるで幼い子供のようなやり取りをしながら、体を洗う二人。そんな中、一夏がふと
呟く。

「……忍、その痣、やっぱり、まだ消えないんだな」

忍の背中と腕には、痛々しい痣があつた。

「ああ……うん。まだ消えないね。これを隠すためには長袖着ないといけないんだよね……。5月になつたらもう暑くなるから、早く消えて欲しいけどね。あの時腕で防がなきや良かったかなあ……」

そう言つて、忍は俯き、少し悲しそうな笑顔を見せた。

「ごめんな……忍。あの時、俺がもう少し早く助けに行けてたら、お前にこんな痣作らせることなかつたのに……」

「謝らないで。一夏は何も悪くないじやない。むしろ、助けに来てくれて感謝してる。

あの時、一夏が来てくれなかつたら、きっと僕、今頃死んでると思うよ」

女子の集団から暴行を受けたあの日、一方的に躊躇っていた忍を、一夏が助けに来たのだ。

「そ、そ、うか……？」

「うん。だから一夏、あの時助けてくれて、ありがとう」

「お、おう……どういたしまして」

「さあ、僕を洗うんでしょ？」

忍はそう言つて、話を切り替えた。

「ああ、そうだつた。よし、気合い入れて行くぜ！」

「あつ、ちよつと、背中で洗うときに力入れるのはやめ……痛あああああ！」
「わ、悪い！」

忍の悲鳴が部屋中に響き渡った。

第2話 不和（ディファレンス）（5）

訪れたセシリアとの対決の日。

一夏と筈は、第三アリーナのAピットにいた。

「なあ、筈」

「なんだ、一夏」

IS学園に入学して一週間経ち、筈と一夏の仲は元に戻ったようだ。

六年の溝はあつさり埋め立てられたらしい。

「ISのことは教えてくれないのか？」

一夏がそう尋ねると、筈は目を逸らした。

「目を逸らすな」

ISの教えで、剣に関して言えば大体昔のカンを取り返せた一夏だが、肝心のISについてはさっぱりである。

なのに、筈は全くISのことを教えてくれない。

忍も「僕は感覚でやつてるせいで教えるの苦手だから他の人にあたつて」の一点張り。つまり一夏は忍が教えた専用機の知識と、今まで読んだ教科書の内容、あの分厚い参

考書の内容だけしか、ISの知識がないということになる。

「し、仕方ないだろう。お前のISがどんなものか分からぬのだから、私にはお前の機体が格闘機であると仮定して、剣道の稽古をつけるしか出来なかつたのだ」「だけど他にも教えられる事あつたろ！ISの基礎知識とか！」

一夏がそう言うと、筈はそのまま固まつてしまつた。

「……失念してたんだな」

「……すまない」

一夏が苦笑いを浮かべ、筈は己の未熟を恥じる。

そんな時――

「お、織斑くん織斑くん織斑くん!!?」

山田先生が転びそうな足取りで、Aピットに駆け込んできた。

「山田先生落ち着いて！深呼吸しましよう！」

「は、はいっ！すー、はー、すー、はー…」

「はい、そこで止めて」

「ふぐつ」

一夏がふざけてそう言うと、山田先生は本当に息を止めた。

こうしている間にも、山田先生の顔は酸欠で赤くなっている。

「…………えつと……」

「…………ふはあつ！ま、まだですか？」

山田先生がそう一夏に尋ねる。

「…………いや、すみません、止めるタイミング見失いました」

一夏がそう言つた直後、パンツ！と言う軽い打撃音と、ゴンツ！という鈍い打撃音が連續して響く。

それと同時に、一夏は二重の衝撃を後頭部に受け、頭を押さえる。

「目上の人間には敬意を払わんか」

「山田先生が酸欠で病院送りになつたらどう責任をとるの、一夏」

一夏が声のした方を向くと、

鬼　が　二　人　い　た　。

「し、忍、千冬姉……」

パンツ！

千冬先生のバインダーが一夏に炸裂する。
一ミリもブレずに全く同じ位置に当たられ、一夏はまた頭を抑えた。

「織斑先生と呼べ。いい加減学習しろ」

「僕らの名前を呼ぶより先にやることがあるでしょ、一夏」

「……すみません、山田先生」

「い、いえ、気にしないでください。慌てた私も悪いですしちゃ」

（しかし千冬姉の教育者とは思えないこの態度……これから彼氏出来ないんじや
……）

一夏が心の中でそう呟くと、

「ふん。手のかかる弟らが独り立ちするようになれば、お見合いだろうが結婚だろうが
いつでも出来る」

まるで一夏の心を読んだかのように、千冬先生がそう言つた。

（家で手がかかるのは千冬さんのような気もするけど）

「……」

（うぐつ……）

千冬先生が無言で忍を睨む。

忍は表情に出さないようにして いたが、どうやらそれすらお見通しらしい。

「そ、それでですね、来ました！織斑くんの I S！」

（一え？）

「織斑、すぐに準備しろ。お前のＩＳを一次移行させるため、今回の試合は忍を先に出さ
せるが、いつお前の出番が回つてくるか分からん。早急にものにしろ」
（—えつ？）

「可能な限り時間は稼ぐから、頑張ろう、一夏」

（—ええつ？）

「この程度の障害、お前なら乗り越えられるさ、一夏」

（—えええつ？！？）

「え？え？なん……」

「」「早く！！？」

という、四人の声に遮られた。

そして、ピット搬入口が鈍い音を響かせ、ゆっくりと扉を開ける。

——そこには、【白い騎士】がいた。

純白の鎧は、その装甲を開き、主人を待つているかのように見える。

「これが……」

「はい、織斑くんのＩＳ、【白式】です」

「すぐに装着しろ。先ほども言つたが、いつまで忍が持たせるか分からん。間に合わな

かつたら実戦でフォーマットとフィッティングを済ませろ。できなければ負けるだけだ。いいな」

そんな会話の途中、白式を見た忍はふとそんなことを思う。

(どこかあの時の千冬さんのISに似ているような気がするな……)

忍がそう思っている間に、千冬先生に急かされた一夏は純白の鎧に触れる。

「……あれ？」

何か違和感を感じたのか、一夏がそう呟く。

「どうしたの？」

カタパルトに乗った忍が尋ねる。

忍は、大きさこそ違うものの、【白騎士と堕天使事件】の頃に一夏が見たあの黒いISを纏っていた。

足首には、既に固定用のロツクがかかっている。

「いや……初めてISに触れた時のような感じがしなくて」

一夏はそう答えた。

「一度触れたからじゃないかな？ 一度体験したことは慣れちゃうし、新鮮さを感じなくなるのかもね」

そう言うと、忍はまだ開いていない戦場への扉を見つめる。

「背中を預けるように装着しろ。座る感じでいい。後はシステムが自動で最適化をしてくれる」

千冬先生に言われた通り、一夏は白式に体を任せた。

すると、装甲が一夏に合わせて閉じ、空気の抜く音が鳴った。

そして、一夏の目に、様々な情報が飛び込んでくる。

ほとんど基礎知識がない一夏だが、その情報は瞬時に理解できた。理解できてしまつた。

理解できることに、一夏は少し驚く。

驚きつつも目で流れ込んでくる情報を追つていると、新たに一つの情報が、一夏の目の前に現れた。

「あ……」

そこには、こう書かれていた。

『戦闘待機状態のISを感知。操縦者：セシリア・オルコット。ISネーム：「ブルー・ティアーズ」。戦闘タイプ：中距離支援型。特殊装備あり』

そこには、カスタム・ウイングにビットらしき物が四つ付いた機体が映っている。どうやら、今回の相手、セシリアのISについても教えてくれるようだ。

忍も、同じ情報を見ていている。

(……これ、相手の個人情報ほとんど筒抜けつてことだよね……万が一実戦が起きた時、大丈夫かなあ……)

忍は、情報を見ながら完璧すぎるISのハイパーセンサーに多少の不安を覚えた。

「ISのハイパー・センサーは問題無さそうだな。……一夏、気分は悪くないか?」

一夏に話しかける千冬の声が、少しだけ震えているのが一夏に伝わる。

そして、兄妹だから、一夏には分かる。

これは、自分への心配からくる声の震えだと。

「大丈夫、千冬姉。問題ない」

「……そうか」

安心したような声。

だが、それはハイパー・センサーがないと分からぬよう声色の違いだつた。

(でも、俺のこと名前で呼んでたし、やっぱ分かるかな?)

一夏は、心中でそう思つた。

そして、一夏は、忍の方に意識を向ける。

忍は、少し震えていた。

これも、ISが無ければ分からぬレベルのものなのだろう。

「忍」

「!?!?」

「一夏に呼ばれ、忍は驚いたのか、肩を震わせた。
「な、なんだい？」一夏】

そう返す忍の声は、驚きからか、上擦つていた。

それも、ハイパーセンサーが無くとも分かりそうなほどに。

「大丈夫だ。お前ならきっと負けないさ」

一夏はそう言つて、忍を励ます。

「今回やるのは時間稼ぎと同じなんだけどね……。だけど、ありがとうございます、一夏。少し落ち着いた」

忍は下げていたバイザーを上げ、笑顔を見せた。

「おう。頼むぜ、忍」

「負けるなよ、忍。お前には、私も期待している」

「参ったなー……。今言つたけど、僕がするのは時間稼ぎなんだけどねー……」

一夏と箒に背中を押され、忍は、少し困ったような笑みを浮かべた。

だが、すぐに表情を険しくし、バイザーを再び降ろした。

「それじゃあ行つてくる。白波忍、【ヴァルキュリア・ベルフェゴル】行くよ！」

忍がそう言うと、カタパルトが動き出す。

扉が開き、フィールドの姿を露わにしていく。

開いた扉の前にカタパルトが辿り着くと、足のロツクが外れ、忍を戦場に放り込んだ。

「あら、逃げずに来ましたのね……つり?」

高飛車な態度を取ろうとしたセシリ亞だが、忍の纏うベルフェゴルを見た途端、一瞬
だが表情が変わった。

「……? どうした?」

「……いえ、何でもありませんわ。（他機の空似……ですかよね？）それよりも、今なら
見逃して差し上げますわよ？代表候補生ですらない貴方に私が勝つのは自明の理な
ですから」

戦闘開始の鐘は忍がカタパルトを降りた時に鳴り終わっており、セシリ亞はいつでも
忍を狙い撃つことができる。

だが、直ぐに撃たずに、こうやつて降参を勧めてくるのは、セシリ亞の余裕の表れな
のだろう。

「嫌だ。僕はもう弱いままじゃない。あなたのような人に背を向けるようなら、僕のしたいことも出来なくなる」

忍はそう言つて、セシリ亞の勧めを拒絶した。

「そうですか。そちらが逃げてくだされば楽でしたのに……では」

そう言うと、セシリ亞は、その手に持つ銃を構えた。

《ヴァルトラウテ、シュヴェルトラウテ起動。……マスター、ブルー・ティアーズの操縦者の左目が射撃モードに移行しました。セーフティーも解除されています》

アルヴィトが戦闘指揮システム【シュヴェルトラウテ】と、恐怖心緩和システム【ヴァルトラウテ】を起動させ、セシリ亞が射撃準備を整えたことを忍に伝えた。

そして――

「お別れですわ！」

そうセシリ亞が叫ぶと、銃口に光が集まり始めた。

《ブルー・ティアーズが射撃体勢に入りました、エネルギー装填。トリガー確認……マスター、来ます！回避を！》

そうアルヴィトが言つた直後、忍の横をレーザーがすり抜けた。

「……っ!!?」

忍は咄嗟に体を捻つて避けたが、今の射撃で、ベルフェゴルの肩の装甲が少し持つていかれた。

肩に激しい痛みが生じた忍は少し顔を歪めながら、こう思考する。

(流石は代表候補生：つてところかな。射撃が凄い正確だ。見てから避けるのはちょっと難しかったよ……)

しかし、IS自体には大きなダメージにはなっていないようで、S Eは561と、まだ余裕がありそうだ。

セシリ亞の射撃の威力と正確性を身をもつて知つた忍はとりあえず回避に専念しようと心に決める。

「さあ、踊りなさい!!? この私、セシリ亞・オルコットと、ブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で!!?」

セシリ亞はそう言つて、レーザーライフルを連射し始めた。

激しく警報が鳴る中、忍はアルヴィットの声を頼りに回避を繰り返すが、すべてを避けるほどの技量を忍は持ち合わせていない。

時々受ける攻撃で徐々にSEが削られていく。

（本当はただの時間稼ぎだけど……等に負けるなど言われたし、あちらも全力で戦つて欲しいみたいだし……負けられないな、これは）

心中でそう呟きつつ、忍はダガービット【オルトリンド】を一機呼び出す。

そして、忍はそれを手に持ち、射撃を続けるセシリ亞に向かつて投げつけた。

それに気づいたセシリ亞は、レーザーでオルトリンドを撃ち抜く。

オルトリンドは、推進剤を撃ち抜かれ、爆発した。

「くつ、目くらまし!!?なら、私の後ろ!!?」

セシリ亞は忍を見つけ出そうとして、後ろを振り向くが、

「はあああああああ！」

忍が左腕を自分の面前に構えて爆煙の中から現れ、呼び出した不折の剣【スルーズ】で、セシリ亞に斬りかかる。

「なつり!?」

咄嗟の判断が出来なかつたセシリ亞は、銃を盾にし、攻撃を受けるのを免れ、銃が爆発した。

だが、それだけでは終わらない。

「やあつ…!!?」

忍はセシリ亞を蹴り飛ばし、さらにエネルギー状の槍【ゲルヒルデ】を一本呼び出し、

セシリ亞に向かつて投げつけた。

回避が間に合わず、セシリ亞のＳＥが540まで下がる。

それと同時に、槍も消滅する。

「ぐつ、ぐつ……やつてくれますわね」

ＳＥが一気に削られたセシリ亞が唸る。

「さつきのお返し」

忍はそう言うと、バイザーの下で不敵な笑みを浮かべた。

「おかしな方ですわね……。でも、私の主力兵装の【スター・ライトmk-III】を壊されてしましましたし、これは奥の手を見せる時が来たようですわ」

そう言つて、セシリ亞は口元を歪めた。

そして、十七分経ち、戦局は若干セシリ亞に傾いていた。

「お行きなさい!!?」

「やらせるか!」

二人のISのビットが戦場を飛び交う。

セシリヤのISのカスタム・ウイングから放たれたビット【ブルー・ティアーズ】が
忍を追い立て、あわよくば撃ち抜こうとレーザーを放つ。

しかし、忍のオルトリンドが飛びかかり、ブルー・ティアーズを両断した。

だが、レーザーが放たれた後のビットを斬つたところでレーザーを反らせるわけもな
く……

「ぐつ……」

レーザーは容赦なく忍を撃ち抜く。

他の三機のブルー・ティアーズも忍を追い立てるが……

「まだ、負けてない……」

二機目のオルトリンドがレーザーを放ち、ブルー・ティアーズをもう一機打ち碎く。

それでも食い付き、レーザーを放つブルー・ティアーズだつたが……

「……」のビットの攻撃の仕掛け方、ようやく分かつてきた。遅すぎるよ、僕……

そう忍は小さな声で呟き、襲いかかる二機のレーザーを後方に旋回して回避すると、
ブルー・ティアーズに斬りかかる。

そうは行くまいと二機のブルー・ティアーズは容赦なくレーザーを放つものの、忍は
左右に旋回。

これを回避して、二機のブルー・ティアーズを一閃した。

「……で決めなきや……」

そう咳き、忍は間合いに飛び込もうとする。

「……ここまでですか？」

そうセシリ亞が言うと、腰のスカートアーマーが開き、二発のミサイルがその姿を現した。

「……つり!?」

突撃を掛けようとした忍が、急停止する。

「……ブルー・ティアーズは、全部で六機あります。そのうちの一機はミサイル型。迂闊に近づこうとしたあなたの負けですわ」

そう言うと、セシリ亞がミサイルを放つ。

その時、忍の脳裏に【白騎士と墮天使事件】の時の光景が浮かんだ。

——暗い空

——襲い来るミサイル

——炎に包まれて沈む一隻の船

「ミサ……イル……いや……いや……!!?」

「……？なんですか……？」

忍が急に震え出す。

逃げようとしたが、ミサイルはしつこく忍を追いかける。

「まずいな……」

ピットでモニターを見ていた千冬先生が苦々しい顔でそう呟いた。

「どうしてですか？」

「あいつは【白騎士と墮天使事件】の一件がトラウマになつてゐる。あの弟とは違い、あいつは多少纖細なところもあるからな」

トラウマになつてていること以外は出任せである。

忍はテレビなどではなく、その目で実際にあの光景を見た。

それは、五歳の子供には、あまりにも凄惨すぎる光景だつたのだ。

「でも、あのISには恐怖心を緩和させるシステムがあるって……」

「ああ。だがそのシステムは高所への恐怖心や、戦闘への恐怖心など、IS展開中に常に感じるであろうものだけを想定して作動している。トラウマのように、突発的な外部的

要因の恐怖心が働くと……」

「どうなるんですか……？」

「システムが過剰に作動してしまう可能性が高い」

『マスター、落ち着いて！あの時のミサイルじゃありません！だから、落ち着いて！？』

アルヴィトが忍を鎮めようとするも、トラウマを刺激され、忍の精神はもう限界だつた。

突然、忍が狂つたように叫ぶ。

千冬先生が警戒していたように、恐怖心緩和システム【ヴァルトラウテ】が、忍のト ラウマからの恐怖心を抑制するために過剰に作動し、暴走したのだ。

「なつ……!?」
「一体何が起こったんですの……!?」

セシリアが驚愕の声をあげる。

暴走した忍の耳には、最早、誰の声も、アルヴィイトの声さえも届かない。

忍は、ミサイルの一機に向かつて飛び込むと、剣を振り抜き、それを両断した。

もう一機のミサイルも忍を狙うが、忍はそれも一閃。

「ウウウウウウ…!!?」

忍は、左手のマニピュレーター【ヒルド】にエネルギーを込め、貫手の構えをとり、セシリ亞を貫こうとする。

「い、インターセプター!!?」

とつさにセシリ亞は、近接武器のショートブレード【インターセプター】を呼び出し、面前に構え、攻撃を受け止めようとした。

だが……

「…………!!?」

忍がセシリ亞に向かって踏み込もうと地を蹴ったその時、ベルフェゴルのSE残量が0になつた。

《試合終了。勝者：セシリ亞・オルコット》

「え……？」

自らの勝利を告げるアナウンスを聞き、セシリ亞が呆けた声を出した。

「……」

I Sが解除され、忍は氣を失い、その場に倒れた。

「……」

忍が担架に運ばれ、セシリ亞一人がフイールドに立っていた。

第2話 不和（ディファレンス）（6）

「う、ううん……」

夕方、忍はベッドの上で目を覚ました。

ベッドといつても、寮室のぬいぐるみで囲まれた柔らかいベッドではなく、病院にあ
るような硬いベッドだ。

「ここは……？」

そう言つて、忍は周りを見渡す。

外は茜色に染まり、グラウンドには人の影もない。
ベッドの形状から察するに、ここは保健室だろう。

「……まだ夕方だし、ご飯食べに行こうかな」

そう思い、忍が起き上がるうとした瞬間――
「忍、起きてるか？」

一夏の声がそう問いかけた。

いつからいたのか、カーテンの後ろに人影が見える。

「……うん、起きてるよ。一夏」

忍は少し顔を曇らせ、数秒ほど間を空けた後にそう返した。

「入るぜ」

「うん」

そう言つて、一夏はカーテンを開ける。

左手には、お見舞いのつもりなのか、林檎などの果物が入った籠がぶら下がつていた。
「……そういうえば、代表決定戦はどうしたの？一夏の番だつたよね？」

忍は、クラス代表決定戦のこと尋ねた。

ミサイルを見た後の記憶が抜け落ちていたのだ。

「ああ、それなら千冬姉の提案で明日に延期になつた。割と時間も迫つてたしな。使えても、時間はごく僅かだつたと思う」

「そ、う、な、ん、だ、…」

家庭科室から借りてきたらしいナイフで果物を切りながら、一夏はそう答えた。

「…………めん」

「ん？なんで謝るんだよ？」

「だつて……『お前ならきっと勝てる』って言われたのに、トラウマに怯えて逃げ回つて負けるなんて……」

明日に延期になつた、ということは、自分はセシリヤに負けたのだろうと、忍はそう

結論づけた。

「なんだよ、そんなこと気にしてたのか」

そう言つて、一夏は笑う。

「そんなことつて……親友の期待だよ？ それを裏切るなんて……」

「あまり重く考えないでいいんだぞ？ 千冬姉から聞いたよ。お前が『白騎士と墮天使事件』のことがトラウマになつてること。トラウマなら逃げて当然だろうしな。しかもお前はテレビじやなくて実際に見てるわけだし。籌もきっと同じこと考えて『負けるな』って言つたんだと思うぜ。実際に見てることに気付いてるかは分からぬけど」

「そ、そうかな……？」

「ああ。だから、次は俺のことも応援してくれよ？」

「当たり前だよ。きっと勝つてね。親友」

「おう！ 任せとけ！」

二人は右手で拳を作り、それを小さくぶつけ合う。

沈み行く太陽が、二人の拳を優しく照らしていた。

一方、セシリアは自室でシャワーを浴びていた。

金色の髪から、水滴が滴り落ちる。

「今日の試合……」

彼は最後に一度逃げ回つたとはいえ、それまでは恐れすらせず立ち向かつてみせた。なぜ、彼はそんなことが出来たのか。

「……分からない」

男は皆、女に畏怖するものだと思つていた。
だが、彼は、そんな様子は全く見せなかつた。

それは、I Sを纏えることから来る自信の表れなのだろうか。

「……そういえば」

彼の隣には、いつもあの男がいた。

「……織斑、一夏」

彼も、セシリアが知つてゐる男とは全く違う男だつた。

彼は初めて邂逅したあの日、他人を窘めつつ自分の意思をはつきり示してみせた。

彼の存在も、忍の支えになつてゐるのだろうか？

(……父は母の顔色をうかがうばかりの人だつた)

ふと、セシリアは父のことを思い出す。

名家に婿入りした父は、母に引け目を感じていたのかもしれない。

母に媚びるような父を見て、セシリアは、『情け無い人とは結婚しない』という思いを

幼い頃から抱いた。

セシリ亞の男を見下す態度も、そこから来たものである。

オルコット家に関わる男が全て情け無い男ばかりで、いつからか、男全てを見下すようになつていた。

そして、ISが発表されてから、父の態度は益々弱々しいものになつた。

それからの母は、父との会話を拒んでいるようにも見えた。

（母は強い人だつた……。女尊男卑の風潮になる前から、いくつもの会社を立ち上げ、成功を収めた人だつた）

厳しいが優しい、セシリ亞にとつて自慢の母だつた。

だが、三年前の越境鉄道の横転事故が起きて、セシリ亞の両親は帰らぬ人となつた。

死傷者は百人を超えて、その中に、両親もいた。

（……普段会話すらしていなかつたのに、何故、あの時だけ……。私を置いていつて……）

セシリ亞の手元には莫大な資産が残り、それを守るために様々な勉強をした。

その一環のIS適性テストでA+が出て、政府から、他所に取られないための国籍保持のために、様々な好条件が出され、セシリ亞は、両親が遺した遺産を守るため、その条件に飛びついた。

そして、第三世代型ISのブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選抜され、稼働データと戦闘経験値を得るため、セシリリアは日本にやつて来た。

そして、あの二人に出会つた。

「白波、忍……織斑、一夏」

何故、あの二人は女尊男卑が当たり前のこの世の中で、女性に屈しないのか。何故、あの二人はこんな世界の中でも、あんな強い意志を持てるのか。

「……知りたい」

あの二人を。

この女尊男卑の世界でも曇らない、強い目を持つた男たちを。

(そのためには……親睦を深めていかないといけませんわね)

そんなことをセシリリアが考へていると、部屋からリモコンで通信が入る。

「はーい？」

「セシリリアー、いつまで入つてるのさ。もうお湯空っぽ！」

「え……？」

ルームメイトである如月キサラの話がにわかには信じられず、セシリリアはリモコンを見る。

そこには、残り湯無しの表示が出ていた。

「な、な……!?」

「私もシャワー浴びたかったのに……」「も、申し訳ありません!!？」

そして、夜は更けていつた。

翌朝、一夏と忍は廊下を歩いていた。

「なあ忍、お前もう動いて平気なのかよ？」

一夏が心配からそう尋ねる。

「うん、大丈夫。心配してくれてありがとう。でも、一夏も自分の心配をしないとね？」

「わ、分かってるつて。ところで忍、俺のISなんだけど、武装が剣一本だけなんだけどさ……」

一夏が唐突に話題を変えてきた。

しかし、その内容に忍は驚愕の表情を浮かべた。

「えつ……!? いや、第三世代なのにそれはおかしいんじや」

「まあ落ち着けよ。その剣の名前がなんと【雪片式型】って言うんだ」

「……!? その剣の名前……」

「ああ、千冬姉のIS【暮桜】の専用装備【雪片】と同じ名前なんだ。凄えよな、運命す

ら感じそうだ」

「そうだね。それとその剣を使うことは、千冬さんの名前を預かるみたいなもんだし、強くならなきやね」

「おう、というわけで忍、レクチャー頼む！」

「まともに教えられないから実戦形式になりそう……」

二人がそんなことを話しているうちに、教室に着いた。

忍が教室のドアを開ける。

「おはようございます」

二人が挨拶する。

「忍、もう動いて平気なのか？」

箒がそう聞いてくる。

「うん、大丈夫。ありがとう心配してくれて」

「昔からの友であるお前たちが怪我したとあつては私も悲しいからな、無事で良かつた」

忍はそう返し、箒は少し微笑みながらそう言つた。

「それと……ごめんなさい」

「ん？……ああ、昨日のことか。そのことなら氣にするな。私もミサイルが飛んできた

ら斬つたり逃げ切つたりする自信はないからな。怖いと思うのは当然だと思う

「うん……ありがとう」

『良かつたですね、マスター』

（うん。ありがとう、アルヴィト）

「まあ、ISを纏つてるのにそれはないだろとは思つたけどな」

そう言うと、筈はくすつと笑つた。

「否定出来ないけど、ひどいよ…………」

「すまんすまん、少しからかつただけだ」

「もう……」

少し頬を膨らませつつ、忍は席に着いた。

「しのぶー、大丈夫？頭とか痛くない？」

席に座つた忍に、本音が声を掛けた。

「みんな僕なんかのことを本気で心配してんのだ……。ありがとう、でもこの通り元気」

「そうなの？良かつたよー。あと、渡したいものがあつてねー」

そう言うと、本音はだぼだぼの袖を漁りだした。

忍が不思議そうな顔をしていると、本音は、小さいお菓子がたくさん入つた袋を取り出した。

「はい、これどーぞー！」

「え……？」

「多分昨日の戦いで疲れてるかなって思つてー。甘いものは疲労回復に効果的って聞いたことがあるから、お菓子は効果てきめんかなーって思つてお菓子をたくさん袋に詰めたんだー！」

「……でも、いいの？僕なんかにこんな渡して……。貴方は、お菓子をよく食べるんでしょ？」

「いいよー、渡すためにお菓子を袋に詰めたから！」

「そ、そう……？なら、いただきますね。ありがとうございます。布仏さん」

「本音つて呼んでほしいなー、同じクラスメイトだし！」

「うん。分かつた、本音さん」

そんなことを話しつつ、忍は心の中でこう呟く。

(やつぱり、ここにはいい人が多いな：僕のいたあの学校とはまるで違う。女尊男卑なんて、初めからなかつたみたいに)

すると、千冬先生たちが教壇に立つ。

「おはよう、諸君。本当に突然だが、クラス代表決定戦が中止になり、代表は織斑が選抜されることとなつた。誰か異論のあるものはいるか？」

「「……え？」

一夏と忍の声が綺麗に重なる。

そのまま二人は硬直する。

そして、誰も異論を唱えようとはしなかつた。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりでいい感じですね！」

山田先生は、嬉々とした話し方でそう言つた。

（あれ？おかしいぞ？まだ一夏の試合残つてるよね……？）

《ですね。何故でしよう……？》

忍とアルヴィートが脳内でそう会話していると、

「ちょ、ちょっと待つてください！」

一夏が手を挙げた。

「はい、織斑くん！」

「まだ俺の試合は始まつてすらないのに、何故クラス代表になつてるんですか？」

「それは——」

山田先生が理由を話そうとした瞬間、

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

席を立ち、セシリアが胸に手を当てそう言つた。

((いやなんで辞退してるんだよ《ですか》))

忍たちは、心の中で同時にツッコんだ。

「まあ、ISに乗つて一ヶ月も経たない初心者が、代表候補生であるわたくし、セシリ亞・オルコットに挑むのは、流石に可哀想ですしつ……」

(ひでえ。まあ実際そんなんだけさ)

「それに、わたくしも協調性がない行為をしてしまいました。そんなわたくしでは、クラスの代表には不釣り合いだと思い、それを反省し、一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたの。IS操縦は、実戦が一番糧になりますし、クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

(ありがた迷惑だなあ……ん? 今俺のこと名前で呼んだ? あと、なんで忍と戦った後に……? あ、忍と俺が戦うと確実に俺が負けるからか)

「いやあ、セシリ亞分かってるね!」

「だよねー。私たちは貴重な経験を詰めて、他のクラスの子に情報が売れるし。一粒で二度おいしいね、織斑くんは」
(だから商売にするなつて……)
一夏は心の中でそうツッコんだ。

「それでですわね、わたくしがIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみる成長

を――

セシリ亞が言い切る前に、机を叩く音で遮られた。

そして、簞が立ち上がった。

「生憎だが、一夏の教官は私で事足りている。済まないが、他を当たってくれ」
 「そうでしたのね。ですが、引き下がるつもりはありませんわ。わたくしも、一人のクラスマートとして、貴方方の信頼を取り戻し、親睦を深めるために一夏さんのお手伝いがしたいんです。私自身の態度のせいで、こうなつてしましましたが……それでも、今この気持ちに嘘偽りはありません」

「……」

セシリ亞の目は真剣そのものであり、言葉通り、嘘偽りのないことを窺わせる。

「……そうか。私も説明は苦手だ。お願ひしてもいいだろうか？」

「ええ、勿論ですわ。二人で一緒に一夏さんにＩＳのことを教えていきましょう」「ああ！」

そして、二人は互いに歩み寄り、固い握手を交わした。

（セシリ亞、変わった……？）

そう思い、忍が少し驚いたような表情をしていると、

「うむ。友情が芽生えるのはとても良いことだ。だが……」

その声に二人の顔が、青ざめていくのが分かる。

二人が声がした方を向くと、

バシンバシンツ!!?

「……今はS H R中だ。席につけ、馬鹿ども」

そう言つて、千冬先生が一人の頭を同時に叩く。

(流石元日本代表にして第一回世界大会の覇者。凄みが違うな)

一夏は心の中でそう思つた。

そして、二人はすごすごと席に戻つた。

そんな二人を見て、一夏が何か閃いたような顔をする。

(凄みと、すぐすぐ)……なんつって

その時、

バシーンツ!!?

という音とともに、一夏の頭に衝撃が走つた。

「その得意げな顔はなんだ。やめろ」

千冬先生が出席簿で叩いたことによる衝撃だつた。

(うーん、千冬姉、職場ではこんなにしつかりしていたのか。そういうえば、俺たちが寮で暮らすようになつてから、千冬姉洗濯物ちゃんと自分でしてんのかな。ずっと俺らにや

（……たけど）

（……というか、せめて下着くらい自分でネットに入れて欲しいよ……。男に女性もの
の下着任せちゃいかんでしょう……）

（それくらいはやつてくれよ、二十四歳社会人）
などと二人が心の声を漏らしていると、

バシンツ!!?

バシンツ!!?

という音とともに、二人の頭に衝撃が走った。

言わずもがな、千冬先生の出席簿で殴られた衝撃である。

「……お前達、今何か無礼なこと考えていただろう」

「「そんなことは全くないです」

「……ほう……」

バシバシバシバシンツ!!?

という音とともに、二人の頭に二連続で衝撃が走る。

「「すみませんでした」

「分かればいい」

そう言って、千冬先生は教壇に戻った。

(理不尽な……)

(痛い……というか手の動き見えなかつた)

《マスター、大丈夫ですか?》

(だいじよばない)

《ですよね……》

二人が頭を抑えている間に、ほぼ全会一致でクラス代表は一夏に決定した。

その中で、一夏だけが不満そうな顔をしていた。

第3話 鈴の音一つ（1）

四月の下旬の朝。

グラウンドで全員が並び、千冬先生の授業を受ける。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、白波、オルコット。試しに飛んでみせろ。織斑は初めて見えるが、白波たちと放課後に訓練していたようだからな。初めてという言い訳は通用しないぞ」

((バレてた『ました』か))

一夏たちは、千冬先生の観察力に脱帽せざるを得なかつた。

セシリヤと忍の戦いの後、彼らは訓練の内容を放課後の剣道の訓練からIS操縦の訓練にシフトしていたのだ。

これは、一夏が『ISのことを学ばないと、あの二人に追いつけないし、そうなつたら、千冬姉の名前に泥を塗り直すことになるかもしれない。そんなのは嫌だ』と言つて決めたことである。

「早くしろ。熟練のIS操縦者は展開までに一秒もかかるない。お前たちもそうなれるよう努めしろ」

オープン

そう言われて、忍とセシリ亞が同時に、少し遅れて一夏が、それぞれ展開を終えた。セシリ亞の四つのBTは、とつ々に修復が終わっており、スカートアーマーに新品のそれが付いていた。

「よし、飛べ」

その言葉と同時に、セシリ亞は飛び上がり、グラウンドの上空を飛び回る。

忍もセシリ亞が飛び上がるのと同時に翼を大きく羽ばたかせて飛び上がり、上空を飛び回り始める。

一夏も飛び上がり、グラウンドの上空を飛び回り始めたが、その速度は二人と比べてかなり遅いものだつた。最初はフラフラしたが、すぐに体勢を立て直し、真っ直ぐ飛べるようになった。

何も経験がないところから、始めて一ヶ月にも満たない放課後の特訓だけでここまで腕を上げているのだから、目覚ましいほどの進歩である。

「何をやつているんだ、織斑。スペック上の出力では白式が二人のISよりも上だぞ」
だが、千冬先生は容赦なく一夏を叱る。

その時、セシリ亞から忍に個人間秘匿回線で通信が入った。
ブライベート・チャネル

『忍さん、一夏さんはまだイメージをはつきり固めておられないご様子。わたくしたちでイメージのことを教えて差し上げた方がよろしいのではないでしようか?』

《そうだね、そうしようか》

二人のわだかまりは、放課後の一夏の訓練にセシリ亞も同伴することによつて、すつかり無くなつており、忍も、周りの生徒と同じようにセシリ亞と接するようになつていた。

そして、二人は速度を落とし、一夏に近付いた。

「なあ、セシリ亞、忍。『角錐を自分の前方に展開するイメージ』ってどうやるんだ？ よく分からんないんだが」

一夏は困った表情を浮かべつつそう言つた。

「一夏さん。イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索すればいいのですわ」

「僕は翼を羽ばたかせるイメージで飛んでるけど、一夏は？ どんなイメージしてる？」

「うーん……背中からジエット噴射してる感じかな」

「なら、それをもつと強く意識して飛ぶといいよ」

「ISはイメージが大切ですから、そのイメージに任せて飛んでみてくださいな」

「だけど、そもそもこれどうやつて浮いてるんだこれ……」

一夏がまた疑問を浮かべる。

「まあ、P I Cっていうすごい装置がISにかかる重力を軽減してるとつて考えればいい

「忍さんのもあまり間違つていませんが、結構端折つてますわね……。更に説明しても

構いませんが、長いですわよ? 反重力力翼と流動波制御の話になりますから」「うつ……。俺では理解出来なさそうだからいいです」

「そう、それは残念ですわ。ふふつ」

そう言つて、楽しそうにセシリ亞は微笑んだ。

ただ純粹に楽しんでいるようなその笑みに、かつて、一夏たちや日本を見下していた頃のセシリ亞の面影はなかつた。

そんな時、地上から篝の声がした。

「一夏、忍。オルコットも、そろそろ降りてこい。授業が進まないぞ」

「分かりましたわ。あと篝さん、そろそろ苗字で呼ばずに、セシリ亞と名前で呼んで欲しいですわ」

「む、そうか……。分かつた、セシリ亞」

「ふふつ、名前で呼ばれるのは、気心知れた友人という感じがして嬉しいですね」

またセシリ亞は楽しげな笑顔を見せる。

セシリ亞は、過去に男にいじめか何かを受け、男性が苦手なだけだったのかもしれない。

それが女性特権であるはずのＩＳを動かせたなんてこと言われたら、ああなるのも仕方ない。

（……そう思うと、セシリリアは僕に似ている。僕にそれを責める資格はなかつたよね）

忍はそう思うと、少し表情を曇らせた。

「どうかしましたの？ 忍さん？」

ハイパー・センサーで忍の表情の変化に気づいたのか、セシリリアが少し心配した様子で近付いてきた。

「……ううん。何でもない」

忍は首を横に振り、そう言つた。

「それは良かつたです」

セシリリアは、今度は優しく微笑んだ。

心配してくれているということが伝わり、忍は申し訳ないと思いつつ、少し嬉しくなつた。

「ちなみに一夏さん、あんなに遠いところにいる筹さんたちが見えるのはハイパー・センサーのおかげですが、ハイパー・センサーはこれでも機能制限がかかっていますのよ。元々ＩＳは宇宙空間での稼働を想定していて、何万キロも離れた星で自分の位置を把握するために、ハイパー・センサーはあるんですの」

(代表候補生の肩書きは伊達ではない、ということか……。すげえな、セシリアは)

一夏はセシリアの知識量に感心していた。

ちなみに箒の説明だと、

「ぐつ、とする感じだ」

「どんづ、という感覺だ」

「ずがーん、という具合だ」

こんな具合である。

その度に、『擬音ばかりでは分からないですわよ』と、放課後の特訓に付き添うようになったセシリアに言われていた。

箒も箒なりに考えているのだろうが、彼女自身がそう言つた通り、説明はうまくできないのだろう。

知つていることと、その知識を人に分かるように説明することの難しさは、全然違うのだから。

「織斑、白波、オルコット。急下降と完全停止をやつてみせろ。目標は地上から十センチだ」

「了解です。ではお二人共、お先に」

そういうや否や、セシリアはすぐさま地上に向かつた。

ぐんぐんセシリ亞の姿が小さくなつていくのを見て、一夏は、

「うまいもんだなあ」

という感嘆の声を漏らす。

そして、セシリ亞は完全停止も難なくクリアしてみせた。

「よし、僕も」

そう言つて、忍も翼を羽ばたかせ、急降下した。

だんだん忍の姿が小さくなり、やがて姿が小さくなつていくのも止まつた。

（よし、最後は俺だ。気合い入れて行くぜ）

一夏は気合を入れる。

意識を集中させて、翼からジエット噴射しているイメージを思い浮かべる。
体を傾けて、一気に地上へ近付く――。

だが、気合を入れたのが失敗だつたのか、白式の出した速度は予想以上に速く、停止できそうにない。

（しくじつた……）

そして、砂煙が上がつた。

「織斑くん!?」

山田先生が心配した声を出す。

「あら？ 忍さんは……？」

セシリアが忍がいないことに気付く。

煙が晴れると、

「ぐう……いたた……」

「わ、悪い、忍……」

一夏を上にして、忍が押し潰されていた。

一夏を庇つたのだろう。

それを見た一部の女子は、

「こ、これは……」

「お、織斑君が攻め、白波君が受け……」

「一忍キター！ これは……いいものね、イケメン男子がちよつとクールな感じの男の娘を押し倒す……。誰かカメラを！」

このように大騒ぎしている。

「勘弁してよ……」

「馬鹿者。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

そう言つて、一夏は姿勢制御をして上昇し、地面から離れた。

忍もそれに続き、翼を小さく羽ばたかせ、地面から離れる。

『マスター、大丈夫ですか？お怪我は？痛くないですか？』

アルヴィットが少し慌てた様子で聞いてくる。
（もう、アルヴィットは僕のお母さんじゃないんだから……。大丈夫だよ。S Eは減った
けど……。）

『……そうですか、無事で良かつたです』

（ありがとう、アルヴィット）

「（お）二人とも、大丈夫か（でして）！」

籌とセシリアが二人の元に慌ててやつてくる。

「うん、大丈夫、僕は平気」

「俺も大丈夫だ、安心してくれ」

「良かつた！……」

二人は安心したようだ。

そんな忍たちの前に千冬先生が立ち、

「よし、織斑。武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようにはなつてているだろう
「は、はあ」

「返事は『はい』にしろ。社会に出た時『はあ』と返事したら上司にこつひどく叱られる

ぞ

「は、はいっ」

「よし。では始めろ」

千冬先生に言われ、一夏は横を向く。

そして、正面を少し見つめ、誰もいないことを確認し、一夏は右腕を突き出し、それを左手で握った。

(来い……！)

一夏の右腕を握る左手の力が強くなっていく。

すると、一夏の掌から光が放たれ、それが形になっていく。

光が収まるとき、そこには一夏を守る剣【雪片式型】が握られていた。

(よし、だいぶイメージが固まってきたぞ)

一夏はそう思い、口を緩めた。

「遅い。構えてから一秒で出せるようになれ。戦場では相手は武器を出すまで待ってくれないぞ」

そんな一夏を、千冬先生は初心者にも関わらず容赦なく叱る。

(いや、普通戦場のことなんて誰も考えないぞ千冬姉……)

(千冬さん、決勝戦を辞退してからドイツ軍の教官になつてたらしいから、それも関係あ

るのかなあ）

《マスターはお二人が試合に行く時、一人だけ取り残されたから少し怖がつてましたね》
 （そ、その時の話はいいでしょ！）

忍とアルヴィットが脳内で話していると、千冬先生は、

「オルコット、白波。武装を展開しろ」

そう二人に命令した。

「はいっ」

二人はそう返事をすると、武器を出すポーズをとる。

セシリアは左手を肩の高さまで上げ、真横に突き出す。

忍は自分の視線の先に右手を翳す。

すると、二人の掌が一瞬だけ爆発的に光り、二人の手には、それぞれ「スター・ライト
 m k — III」と「スルーズ」が握られていた。

（すげえ……。俺なんかより全然速い）

一夏は二人の展開の速さに感心していた。

「流石だな。だがオルコット、そのポーズはやめる。横に向けて展開しても、相手はお前の視線の先にしかいないからな。お前のイメージを固めるには大切かもしれないが、余計な手間がかかる。次の実習までに直すように」

「はいっ」

セシリシアがそう言うと、千冬先生がまた新たな指示を出す。

「オルコット、今度は近接用の武装を展開しろ。白波はオールレンジ攻撃用の武装を開だ、いいか？」

「はいっ」

「はつ、はいっ！」

忍とセシリシアがそれぞれ返事をする。

そして、セシリシアは【スター・ライトmk—I】を光の粒子に変換した。
続けて、セシリシアは新たに近接用の武装を展開する。

しかし、【スター・ライトmk—I】を展開した時とは違い、光が像を結ばず、空中を彷徨つている。

(……あれ？ おかしいぞ？ 忍と戦っていた時は、一瞬で近接武装を出してみせたのに
……)

一夏はセシリシアの武装の展開の遅さに疑問を覚えた。

ちなみに、忍は既に【オルトリンド】を展開しており、短剣が六つ、忍の周りを浮いていた。

「くつ……」

「まだか？」

苦戦しているような様子のセシリアを、千冬先生は急かした。

「だ、大丈夫です。すぐですから……。——ああっ、もう！ 「インター セプター」 !!?」
武器の名前を叫び、それによつてイメージがまとまつたのか、光はショートブレード

「インター セプター」として形を成した。

「……何秒かかつてゐるんだ。近距離での戦闘になつたらどうするんだ？ 相手に待つて
もらうのか？ この前の試合では咄嗟に名前を呼んだからそれを用意できたわけだが、武
器の名前を呼び、それを展開するということは初心者がやる手法だ。名前を呼ばず、即
座に展開出来るようにしろ。そんな調子では代表候補生の名が泣くからな」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせませ——」

「前の試合で白波に一度間合いに入られただろう？ それが全てを物語つてゐる。近接戦
闘も多少はこなせるようにしておけ」

「……はい」

この二人のやりとりを聞き、一夏はなんであの試合の時一瞬で展開できたのかを理解
した。

すると、チャイムが鳴り出した。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、白波。グラウンドを片付けておけよ」

「はーい……」

「……」

筈が心配そうに一夏を見ていたが、一夏が目線を送ると、筈は顔を赤らめ、帰つていつた。

セシリ亞は、すでに帰つたようだつた。

「誰も手伝つてくれないのかよ……」

「まあ、みんな疲れただろうからね」

「そうだな。さあて、俺たちもやらなきやな」

「IS使えたら早めに片付けられそうなんだけどなあ……」

「おっ！ それいいな、やろうぜ！」

「え、えつ？ でもバレたら……」

「バレないつて！ みんな帰つたし！ 見てる人なんていないつて！」

「わ、分かつた……（千冬さん、僕らの特訓知つてるから、見られててもおかしくないん
だけどなあ……）

そして、二人はISを展開し、グラウンドの手入れを始めた。

その後、二人は忍の心配通り、千冬先生に見つかり、こっぴどく怒られ、反省文を書かされた。

「ふーん、ここがそうなんだ……」

夜のI.S.学園の正面ゲートに、一人の少女が立っていた。

少女の髪は、黄色いリボンで左右それぞれを高い位置で結ばれている。
(アイツら、元気かな……多分この学園にいるのよね)

ふと、少女は二人の幼馴染を思い出す。

片方は元気な姿以外見たことないが、もう片方は、女子にいじめられていたので、女子だらけのこの学園にいるのなら、鬱になつていてもおかしくない。

(ふふつ、あの二人、あたしがここに来たことを知つたら、びっくりするだろうなー)
そう思い、少女は、走り出した。

第3話 鈴の音一つ（2）

夕食後の食堂。

本来は全員帰りはじめている時間帯だが、今日は事情が違つた。

「織斑君、クラス代表決定おめでとー！」

「おめでとー！」

そう言うと、女子たちはクラッカーを一斉に鳴らした。

「…………」

一夏は驚愕と困惑が入り混ざった表情をしていた。

（めでたくない、全然めでたくない……忍はさつさと食い終わつて帰つちまつたからな

…………俺も早く食べてれば良かった）

一夏は心の中でそう呟き、溜め息を吐いた。

だが、お祭りムードの女子にはそれは気付かれなかつた。

「いやー、これでクラス代表も盛り上がるねえ！」

「ほんとほんと」

「ラツキーだつたよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと！」

女子たちの会話を見て、一夏は違和感を覚えた。

（相槌打つてる女子は二組だつたはずだけどな……つていうか、心なしか女子の人数がクラス人数より多い気がする……）

だが、あいも変わらずお祭りムードな女子たちには関係ないようで、飲み物を乾杯していたりしている。

そんな女子たちを困惑した表情で一夏が見つめていると、

「人気者だな、一夏」

そう言つて、いつのまにか隣に来ていた箒が不機嫌そうな顔をする。

「……そう見えるか？」

「ふん」

一夏は箒に聞くも、箒は不機嫌そうに鼻を鳴らすだけで返答もせず、不機嫌そうな表情を顔に貼り付けたまま、お茶を飲んだ。

「まあまあ箒さん、皆さん一夏さんの活躍を期待して、景気付けにこうしたパーティーを開いているんです。箒さんも、折角ですから楽しみましょう？」

そう言つて、セシリ亞が箒の隣に歩いて来た。

「もう……。確かにそうかもしれないが……なんだか友人を都合よく祭り上げられていい

るようで釈然としない……」

「……」

「な、なんだ……？セシリリア」

籌を見て、黙つて微笑むセシリリアに、筹が問い合わせる。

「いえ。ただ、筹さんは一夏さんが本当に好きなんだなと思つただけですわ」「なつ、なななななな！？／＼」

セシリリアがそう言うと、筹は顔を真つ赤にして慌てた。

「ち、違うぞ！一夏は私にとつて二人しかいない幼馴染だし……だからその……決して好きとかそういうのでは……／＼」

だんだん声が小さくなつていき、言い終わると、筹は顔を真つ赤にして、縮こまつてしまつた。

その時、

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生の一人、織斑一夏君に特別インタビューをしにきましたー！」

という、明るい声が響いた。

「「「「おおー！？」」」

女子たちの歓声が一齊に湧き上がる。

もちろん一夏は困惑しきつた表情を浮かべていて。

そして、その新聞部の人は一夏に近づき、

「私は二年の薰子。まゆずみかおるこよろしくね。新聞部副部長やつてまーす。はいこれ、名刺」

そう言つて、自己紹介をしつつ、一夏に名刺を渡した。

一夏はそれを見て、

(うわ、すごい画数。書く人は大変だな)

と思つた。

「ではではばり織斑君！クラス代表になつた感想を、どうぞ！」

そう言つて、薰子は、ボイスレコーダーを一夏に向けた。

「えーと……」

一夏はインタビューを受けるなどと全く考えてなかつたので、困つた顔をしつつ、頭を搔いた。

薰子は、ボイスレコーダーを向けつつ、目を輝かせている。

期待を裏切りたくないでの、一夏は必死にコメントを絞り出した。

「えつと、クラス代表の名に恥じないよう、精一杯頑張ります」

一夏はそう言つて、少し溜め息をついた。

だが、薰子の表情は芳しくない。

「えー、もつと何かないの？なんかこう、『俺に触るとヤケドするぜ』みたいなさー！」

「勘弁してください……」

「まあいいや、これは適当にねつ造するとして」

「薰子がさらりとどんなでもない発言をする。

(いやいやいや、そりやダメだろ!!?)

一夏は内心慌てた。

「あ、セシリ亞ちゃんもコメントちょうどいい」

そんな一夏には目もくれず、薰子はそう言つて、セシリ亞にボイスレコーダーを向けた。

「わたくし、こういったコメントはあまり得意ではありませんが……仕方ありませんわね」

そう言つて、セシリ亞は深呼吸をした。

そして、咳払いをして、続ける。

「ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかというと、それはつまり——

「あ、長くなりそうだからいいや。写真だけちょうどいい」

そう言つて、薰子が話を遮る。

「ええつ!!?いや、最後までお聞きください！」

「いいよ、適當にねつ造しておくから。よし、織斑君に惚れたつてことにしておこう」「ちよつ、違いますわ！私は親睦を深めるために——」

「あーなるほど、つまり惚れたつてことだな！よし！」

「ちーがーいーまーすー！」

そんな時、忍が食堂の前を通りかかる。

「うー……トイレトイレ：エレベーターは廊下の真ん中だつたよね」

『はい、そして男子が使えるトイレは一回の来賓トイレです』

「僕が来ることは分かつてそعدだつたのになんで男子トイレ増設されてないのさ——

……

『増設も時間かかりますから……』

そんな忍を見て、薫子が忍の方へ走り出した。

「ねえ白波君、白波君も何かコメントちようだい!!?」

そう言つてボイスレコードを向ける薫子を見て、忍は困つた表情を浮かべた。

「あ、あの……何についてのコメントなのか分からぬし、僕トイレに行かなくちやいけないので……」

「まあまあ、時間はかけないから！というわけで、織斑君がクラス代表になつたことについてのコメントをちようだい!!?」

そう言つて、さらに薰子はボイスレコーダーを近づけた。

「えつと……一夏の剣は去年の剣道大会全国優勝者譲り。とても強いよ」

忍は少し考え込んでから、表情を戻してそう言つた。

「ああ、箒譲りの剣術だ。そう簡単には負けてやらないさ」

一夏も頷き、忍の言葉に便乗する。

「なつ、わざわざ名前を出さなくともいいだろう!?」?

話題に上がられた箒は、顔を真つ赤にしてそう言つた。

「ふむふむ、なるほど、箒ちゃんは織斑君が好き、と……よし、コメントありがとう！」

「なつ……!?」? //

「さりげなくねつ造された気がするけど、まあいいか……」

《急いでトイレに向かいましょう！》

「そうだね、急がなきや！」

そう言つて、忍はエレベーターに向かつて走つていった。

「これは拡散されますわね……」

セシリリアがそう呟く。

「……//

箒はまたもや顔を真つ赤にして俯いている。

「参ったなあ、箒に変な噂は流れて欲しくないんだが……」

「……この朴念仁め」

「え？ なんか言つたか？」

「なんでもないぞ」

「なんか不機嫌そうだけど……」

「生まれつきだ」

そう言つて、箒はまたそっぽを向いた。

しばらくして、忍がトイレを済ませ、また食堂の前を通りかかる。
その忍を見て、本音が声をかけた。

「ねーねーしのぶー、みんなで写真撮ろー！」

「いや、僕は写真写り悪いから、やめとくよ……。せつかくの記念写真だし、一人でも写真写り悪いのがいると、後から見た時、気分悪くなるでしょ？」

そう言つて、忍は自分の部屋に戻ろうとするが、本音と一夏、セシリ亞に腕を掴まる。

「なつ…………？」

「忍さんだけがいないなんて嫌ですわ。集合写真というのは、クラスの全員が揃つて初

めて、集合写真になるのではなくて？」

「お前だつてクラスの一員なんだ。だからお前だけいないのなんて俺は嫌だ」

「そーだよー。しのぶーはみんなの輪の中にいないとダメなのだー。そもそも集合写真

に写真写りが悪い人がいるだけで気分悪くする人なんていないよー！」

そう言われて、忍は手を引かれて、みんなのに混ざった。

「はい、じやあ撮るよー！一十一はー？」

「——————にー!!?」——————

「残念、二進数の十でしたー！」

「——————ええー!!?」——————

みんなが驚いているうちに、シャツターが切られた。

「あの、忍さん！」

帰る途中の忍に、セシリアが声をかけた。

「……何？セシリア」

背中から声をかけられ、忍は内心びっくりしたが、なんとかそれを表に出すことなくセシリアの声に応えた。

「あの、なんで貴方や一夏さんは、女尊男卑の世の中なのに、あんなに堂々としていられ

るんですか？今や、ただすれ違つただけで男がパシリに使われる世の中だというのに……」

「一夏は特に何もないと思うよ。いつも隣には女の子がいたし、あまり気にしてないんじゃないかな？そもそもあいつ自分に向けられている好意には疎いし」

「そ、そうなんですね……。ですが、貴方は？」

「……ただ、事情があつて女性が苦手なだけ」

「その割には、こここの女子には普通に話せてますが……？」

「それは……」

そう言うと、忍は口を噤んでしまった。

「……分かりました。これ以上は聞きません。その代わり、もう一つ気になつたことを聞いてもよろしくて？」

「……うん」

セシリアがそう聞くと、忍はそれを了承した。

「あの、戦つてる最中に思つたんです。貴方の I.S が I.S を世界に知らしめることになつた二機の I.S のうちの一機【墮天使】なんじやないかつて……」

「……」

《マスター、こゝは……》

(うん。分かつてゐる)

「もし、そなうなら……」

「悪いけど、僕のＩＳは【墮天使】なんて名前じやない。あのＩＳは【ヴァルキュリア・ベルフェゴル】。それとはきっと別物だよ」

「そう、ですか……そなうですよね」

「…………」

これが籌の場合なら、話しても問題なかつたが、もしもセシリ亞がこれを国に話したらとても面倒なことになりそうだと思い、忍は言わなかつた。

「でも、もし【墮天使】の操縦者だという人を見かけたら、こう『伝えて欲しいんです』『伝える……？』

「一夏さんや忍さん、籌さんたちに会わせるためのきっかけを作つてくれてありがとう

「…………覚えておくよ」

「ありがとうございます。では、ごきげんよう」

「うん、また明日」

挨拶を済ますと、セシリ亞は自室へ帰つていく。

忍は、自室へ走つていった。

「～～～～～!!?!!?」

忍は自室に帰つてくると、顔を枕に埋めた。

「ど、どうしたんだよ忍？少し遅いなと思つたら急に枕に顔を埋めて……」
セシリ亞と話している間に先に帰つていた一夏が、忍に尋ねる。

「だつてだつて、あんなことを言われたら照れ臭くて仕方ないよ！」
「お？告白か？」

そう言つて、一夏は忍を茶化す。

「ちーがーうーー！」

「じやあなんだよ？」

「セシリ亞に、会えたきつかけを作つてくれてありがとうつて言われたんだ……」

「ははっ、良かつたな。それにしてもあいつ、少し前から急に変わりすぎじゃね？」

「何かあつたんだろうね、きっと。まあそれは僕らが考えても多分分からぬいし、シャ
ワー浴びようシャワー！」

「おう、そうだな！」

そう言つて、二人はシャワールームに向かつた。

セシリアは、自室に帰つて、ベッドで横になつた。

（忍さんは女性が苦手……なのにこここの女子との関わり合いでそんなことは感じさせなかつた……）

セシリアは、先程の話について考えていた。

（ここ）の女子は外の女性たちと比べると、まだ優しい……。なら、外の女性と何かあつたのかもしませんわね……）

セシリアはそう推察した。

（なら、初対面時の男性を見下したあの言動は、忍さんにとって地雷だつたのでしようね……はあ）

セシリアはそのまま目を閉じた。

（わたくしは、あの人たちと、親睦を深めることなんてできるのでしょうか？）

第3話 鈴の音一つ（3）

朝の教室。

今日は心なしか、普段より騒がしい。

そんな中、忍は本を読んでいた。

「ねえねえしのぶー、何読んでるの？」

本音がそう聞いてくる。

「月の本。最近は色々なことが分かつてきてるから面白いんだ。月の海は玄武岩という石でできていたり、とか」

「ほえー、しのぶーは物知りだなー」

「僕は頭は良くないよ。アルヴィートがお手伝いしてくれるんだ」

「アルヴィート？ アルヴィートって誰ー？」

そう本音に尋ねられ、忍はハツとした表情を浮かべた。

（そつか、僕の脳に直接話しかけるから、アルヴィートは他の人には気付かれないんだよね）

心の中でそう呟くと、アルヴィートが応えた。

『はい。マスター以外と話す必要性はない』と製作者に想定されてますから』

(なんだ)

そして、短い脳内会話を済ませて、忍は本音にこう説明した。

「えつと……アルヴィットは先生。家庭教師さん。オンライン家庭教師ってのがあって、その先生」

もちろん、ウソである。

ヴァルキュリア・ベルフェゴルの情報は、秘匿されているらしいからだ。

もう前回の戦いである程度バレてると思うが、それでも、忍はアルヴィットのことまでバラす気にはならなかつた。

「どんな人なの?」

「えつと……外国人。女性なんだけど、小さい頃から教えてもらつたからか、不快じやないんだ」

「その人がいなくなつたら、しのぶー悲しい?」

「小さい頃からお世話になつた人が死んだら、基本誰だつて悲しいと思うよ。その人を憎んでいたならば、話は変わりそうなもんだけど」

そう言つて、忍は読んでいる本のページをめくる。すると、挟まつていた何かが落ちた。

「あつ……」

落ちたそれを、本音が拾つた。

「はい、しのぶー」

「あ、ありがとう、本音さん」

「えへへー、どういたしましてー」

笑顔でそう言うと、本音は忍が手に持つてゐる、葉としては大きいそれを見た。

「それ、写真？」

「うん、写真」

「綺麗だなー。お月さまの下に男の人と女の」

その写真には、忍と似た髪色の男性と、青白い髪の女性が月に照らされる砂浜の下でこちらに微笑んでいる姿が写されていた。

「この二人、もしかしてしのぶーのお母さんとお父さん？」

「よく気づいたね。そう、この二人はお母さんとお父さん。そしてこの写真は、僕と二人を繋いでくれる」

忍は、少し憂いを帯びた顔をしてそう言つた。

「遠い所にいるの？」

本音は、忍にそう尋ねる。

「うん。遠い。きっとＩＳを使ってもエネルギー切れる」

「ほえー、そんな遠いところに住んでるんだー」

二人で談笑していると、忍は、やや遅れて来た一夏の席に集まっている女子の話を耳にした。

「織斑くんおはよー。ねえねえ、転校生の噂聞いた?」

「転校生? 今の時期に?」

(転校生……)

そう聞いて、忍は顔をしかめた。

転校生は、ＩＳ学園のほとんどの生徒とは違う。

女尊男卑がほとんど感じられないのは、こここの女子たちが男子だろうと平等に、学園の仲間として扱うからだろう。

でも、転校生は、そういうのは関係ない、女尊男卑が当たり前の学校からやつてくるので、男子がいじめを受けても何ら不思議ではない。

『今マスターは、弱いままではないですよ。長い間ＩＳの訓練をした上、一夏さんたちと共に武術の稽古もしました。だから、きっと大丈夫です』

アルヴィートがそう言つて、忍を励ました。

(ありがと、アルヴィート)

『いえいえ』

アルヴィットにお礼を言い、脳内会話を終えた忍は、一夏の周りから聞こえる声に耳を傾ける。

「転校生？ 今の時期に？」

今はまだ四月下旬。

なのに転校生は、いささか早すぎる気がする。

それなら、初めから入学届を出せば良かったはずだ。

あまりの早さに、一夏は疑問を抱かざるを得なかつた。

「そう、なんでも中国からの代表候補生なんだってさ」

ふーん、と言つて興味無さそうな一夏とは対照的に、忍は考え方をしていた。

（中国というと、鈴を思い出すな。彼女にはなんやかんやよくしてもらつたし、元気にしてるといいなあ）

心の中で、忍は中国にいるであろう、数少ない女性の友達である鈴に思いを馳せた。

（そういや、代表候補生といえば）

心中でそう呟き、一夏はセシリアに目線を送つた。

「他国の代表候補生の存在を危ぶんでの転入？ それとも、一夏さんたちのデータ取り

……？」

そのセシリ亞は、席に座つたまま、考え方をしているようだつた。

「だが、このクラスに転入してくるわけではなさそつだ。机も増えていないからな。ならば、騒ぐほどでもあるまい」

セシリ亞の肩を叩き、箒は一夏の方を向いてそう言つた。

「そ、そうですわね……。今はそんなこと気にして仕方ないですわね」

「そうだ。来月にはクラス対抗戦が控えている。相手の情報収集も大切かもしけないが、それをするのはお前の実力が納得のいくものになつてからだ。でないと次の戦い、あつさり負けるぞ」

「でもなあ……」

箒にそう諭されるも、一夏は釈然としない様子だつた。

「む……そんなに気になるのか？」

「ああ、少し」

箒の問いかけに一夏が正直に答えると、箒の表情が不機嫌な時のそれに早変わりした。

(私というものがいながら、同クラスはともかく、他クラスの女子を気にするとは……)

「……とにかく、来月のクラス対抗戦に向けて、実戦的な訓練をするべきだ」

「お、おお……」

「他の皆さんだと、訓練機の手続き等で時間がかかってしまいますから、専用機持ちであるわたくしや忍さんの出番ですわね」

「え、僕?……うん、やるよ」

話を振られた忍は一瞬困惑したが、すぐにそう答えた。

「まあ、やれるだけやつてみるか」

一夏が諦め半分といった感じでそう言つた。

「やれるだけではダメですわ！一夏さんには勝つていただきませんと」

やる気のなさげな一夏に喝を入れようと、セシリ亞が声を張り上げる。

「そうだぞ。男がそんな弱氣でいてどうする」

セシリ亞に便乗し、箒も声を上げる。

「一夏ならきつと勝てるさ。なんたつて、昨年の剣道全国大会優勝者の箒の幼馴染だもん」

忍はそう言つて、一夏を励ます。

『そういうのは言わないでいい！』と箒が声を上げるが、スルーした。

「おりむー、ふあいとー！」

そう言つて、本音も一夏を応援する。

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

何故クラスみんなが幸せになるかというと、クラス対抗戦に優勝すると、そのクラスには学食デザートの半年フリー・パスを配られるからだ。

忍が少し本音を横目で見ると、

「えへへ……おかし……おかし……」

そういうわ言のように繰り返していた。

忍はなんだか見てはいけないものを見た気がして、目を逸らした。

「織斑くん、頑張ってね！」

「フリー・パスのためにもね！」

(多分そっちの方が目的だよね……)

「今のところ専用機持つてるクラス代表つて一組と四組だけだし、余裕だよ」

「お、おう……」

女子の雰囲気に圧され、一夏はそう言うしか出来なかつた。

その時、

「——その情報、古いよ」

という、声がした。

（（なんかすごく聞いたことある声……））

そう思い、一夏と忍は顔を上げる。

「二組も専用機持ちのクラス代表になつたの。そう簡単には優勝できないから
そこには、腕を組み、ドアの前に立つているツインテールの少女がいた。
「鈴……？」

「お前、鈴か？」

二人は記憶の中の少女の姿と照らし合わせ、その少女の名を呼ぶ。

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音！今日は宣戦布告に來たつてわけ」

その名を呼ばれた少女は、笑みをこぼし、そう答える。

ツインテールが、小さく左右に揺れた。

第3話 鈴の音一つ（4）

「…………」

一夏と忍が口を開けっぱなしで呆然とした表情をする。

（ふふつ、いきなりあたしが現れてビックリしてるわ）

そう思い、上機嫌な表情になつてゐる鈴に、二人が口を開いた。

「ねえ、鈴、あの……なんというかさ」

「何格好つけてんだ？お前らしくないぞ」

そう言うと、一夏はクスッと笑つた。

「んなつ…………!? なんてこと言うのよアンタは！」

鈴の声が、先ほどの気取つたものから、崩したものに変わつた。

そんな時、

「おい」

という低い声が聞こえた。

背筋が凍りそうな声だったが、鈴は一夏たちとの会話を邪魔されたのが気に食わな

かつたのか、

「何よ!?」

と大声で言い、振り向いた。

その瞬間、

バシインツ!!?

という乾いた音が響き、鈴が頭を抑える。

鈴が顔を上げると、そこには出席簿を持った千冬先生がいた。

「ち、千冬さ……」

「織斑先生と呼べ。もうS H Rの時間だ。さつさと自分の教室に戻れ。それとドアの前に立つて入口を塞ぐな。教室に入れん」

「す、すみません……」

そう言つて、鈴はドアからどいた後、「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！」

一夏を指差し、鈴はそう言つた。

(俺がお前から逃げる要素あるのかよ)

一夏は心の中でそう呟いた。

「早く戻れ。遅刻だ」

「は、はいつ！」

千冬先生に促され、鈴は大急ぎで二組に走つていった。

「アイツ、I S 操縦者だつたのか。初めて知つたな……」

一夏がふと口に漏らしたその言葉。

だが、それが箒の耳に入り、箒の表情が不機嫌になつた。

そして、箒は一夏の隣に立つた。

「……一夏、今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだつたが……」

「ああ、それは——」

「それ私も気になつてた、教えて教えて！」

「あ、私もその話聞きたい！」

「私も私も！」

そして一夏の席には、女子の集まりができていた。

「うわあ一夏大変そう……」

「そういえばしのぶー、しのぶーもあの子知つてたみたいだけど……」

「うん、彼女は——」

そう忍が答えようとした瞬間、バシバシバシバシバシン!!?という連続して響く乾いた音に止められた。

「席につけ、遅刻だとさつきアーツにも言つてただろ」

そして、みんな一夏の席から退散していく。

（うーん、しかしながらこうも知り合いとばかり再会するんだろうな。人生つてのは不思議なものだな）

一夏はそう思いつつ、教科書のページを開く。

今日も、ISの勉強と訓練の一日が始まつた。

（…………）

篝は朝の一件で、授業が手につかないでいた。

（あの一夏の反応、あれはまるで、さつきの女子が幼馴染だというような反応だつた
…………）

そう思うと、篝の不満が強まつた。

（幼馴染は私の知る限り、私と忍くらいのはずなのに……）

そう思いつつ、篝は一夏の様子をうかがう。

一夏は、昨日の失敗を引きずつているのか、眞面目にノートを取つてゐる。

（私が授業に集中出来ない原因が眞面目に授業を受けているというのはなんとも皮肉なものだな……まあ、それでも、私にはセシリアが同伴しているとはいえ、一夏のISの

特訓をしているというさつきの女子に比べて有利な条件がある。同じクラスでもある
しな。ふふ、放課後もまた特訓だな)

そう考えると、筈の口角が上がつた。

だが、一瞬よぎつた思考に、筈は不安感に苛まれた。

(だが、もしも一夏が特訓もいらないくらい強くなつたら……?)

そんな思考を、筈は首を大きく振つて、振り払つた。

(ダメだ。こんな弱気では一夏のI-Sの特訓を出来るわけがない。強気でいなければ)

そんな時、

「にやけたり落ち込んだり首を振つたり忙しいな、篠ノ之。そんな様子なら、今の問題は
解き終わつたんだろう? 篠ノ之、答えは?」

「ひやい!!?」

急に名前を呼ばれて、筈は素つ頓狂な声を出した。

「答えは?」

「き、聞いてませんでした……」

筈がそう答えると、

「ふむ、正直なのはいいことだ」

そう千冬先生が言つた。

直後、

バシーンッ！

という音と同時に、箒の頭に衝撃が走った。

「……だが、きちんと授業は聞け、分からぬなら教師にその内容を質問しろ。私達教師はそのためにいるのだからな」

「はい……」

そして、千冬先生は奥に歩いていった。

「…………」

奥の方では、セシリアがノートにシャーペンを走らせていたが、その筆跡は、意味のない線。

セシリアが集中できていないので明確にするだけだった。

（あの中国の代表候補生の方、既に一夏さんたちと仲がよろしかったご様子……）

その原因は筈と同じ、さつきの鈴、と呼ばれた少女と一夏、忍の関係だ。

（もうこれでは、わたくしにはほとんど混ざる隙が……）

そんな思考を、セシリアは振り払つた。

（ダメですわ。わたくしは、一夏さんたちと、IS訓練するのですから。弱気でいたら、

一夏さんたちに笑われてしましますわね)

だが、セシリ亞はまた悩んだ。

(でも、これでは親密な関係になれた、とは言いがたいですわね……、もつとこう、何か、
親交を深めるキツカケを――)

「……オルコット、聞いているのか?」

奥の席に行つた千冬先生が、セシリ亞に問う。

だが、セシリ亞は上の空で、聞いていない。

「……例えば、一夏さんたちとわたくしで、休日にピクニックとか……?」

「はあ……」

千冬先生が溜め息をつくと、

バシインツ!!?

という音が教室に響き渡つた。

セシリ亞の頭に、出席簿が炸裂した。

第3話 鈴の音一つ（5）

昼休み、食堂にて。

忍、一夏、筈、セシリアの四人が席に座っていた。

ちなみに忍は、弁当の素材を買ってからはいつも屋上に行つて弁当を食べている。

今日もそのはずだつたが、

「たまには一緒に食おうぜ、一人飯なんて寂しいだろ？ほら、行こうぜ」

という一夏に半ば強引に連れて行かれ、今に至る。

「はあ……」

「すぐ殴られましたわ……」

その後、山田先生に注意五回、千冬先生に三回出席簿攻撃を食らつた二人は、昼食が並ぶテーブルの前でげつそりしていた。

「あははは……大変だつたね」

忍はそんな二人を見て苦笑いした。

「二人ともぼーっとしすぎだぞ、千冬姉の前でぼーっとするなんて。それこそ虎の目の

前に焼肉のたれを塗りたくつて出るようなもんだ」

一夏がそんなことを言つた。

（原因であるお前（あなた）には言われたくない（ありませんわ））

二人が一夏を睨むが、一夏本人は、

「何だよ？」

と言つて聞き返すだけだつた。

そんな時、

「相席していいかしら？」

という声がした。

「おお、いいぜ……つて鈴じやないか」

「やつほー、一夏、忍。少し聞くの遅れたけど元気してた？」

鈴は、ラーメンのどんぶりを乗せたお盆をテーブルに置き、一夏の隣に座つた。

（むつ……）

篝とセシリ亞が険しい表情をしているが、一夏たちはそれに気づかなかつた。

「おう、俺たちは元氣だ。お前はどうなんだ？」

「私も……まあ、元氣よ。といふかあんたは少しくらい疲れを知りなさいよ」

「どういう希望だよそれ……」

「一夏は全然病気しないからねー、僕はまあ……元気、なのかな？ここの人たちは良い人たちばかりだから、少なくとも中学の頃よりはマシだと思うよ」

「転校生が来ると聞いて、少し表情を険しくしたけどな」「まあね。転校生ってことは、ここの人たちと同じような人とは限らないから」

忍がそう言うと、アルヴィットがこう言つた。

《マスター、でもマスターが心配することが起きるとは限りませんよ？》

（でも起きるかもしれない。むしろ起きる可能性の方が高い……）

《確かに、外は今、女尊男卑が主流になつていて、すれ違つただけでパシリにすることもあるという社会ですからね》

（そう思うと、ここはゲームでいう安地みたいなものかもしない）

《ですね……。でも今、その安地も侵されつつあります》

（まあ今回は親友の鈴だつたし、そもそも転校生なんて一年に一回くらいしか起こらないイベントだし、気にするほどでもないんじやないかな？安地はまだ残つてるし）

《そうちなのでしようか？私はなんだか不安です。二度あることは三度あるということわざもあるくらいですし》

（でもまだ一回目だし、アルヴィットが心配してるようにことは起きないよきっと）

《私も起きないことを祈つてます》

そんな脳内会話をアルヴィットと交わし終えた忍は、他の皆を見る。

籌とセシリ亞が何やら問い合わせ、鈴はそれを聞き流し、一夏はどうすればいいか分からぬといふ表情をしていた。

「忍、考え事は終わつた？」

「え？ ああうん、終わつたよ」

鈴に尋ねられた忍は、何のことかと思い、一瞬戸惑つたが、アルヴィットとの脳内会話のことだと気付いた忍はすぐにそう答えた。

忍が答えた後、鈴がこう尋ねてきた。

「ねえ忍。髪、切つた？」

一瞬だけ、一夏たちの席は沈黙に包まれた。

その静寂を、鈴が言葉を続けることで打ち破る。

「あの時の忍の髪、女の子みたいに長かつたし、弄るの楽しかったから」

「……私も気になつていたが、一夏の件でしばらく忘れてしまつっていた。私にも教えて

くれないか、忍」

筹も忍の変化に気づき、そう尋ねた。だが、

「……別に、少しうつとおしくなつただけだよ」

忍は、そっぽを向き、それだけしか答えなかつた。

「ところで、お前は……」

竪が鈴に尋ねる。

「凰鈴音。鈴でいいわ」

「そうか、では鈴。お前は、一夏といつから知り合つていつまで一緒にいた？」

「え？」

「私は一夏と昔馴染みの仲なのだが、お前が隣にいた記憶がなくてな。お前が良ければ教えてもらいたい」

「三年。あんたは？」

「……驚いたな。私もそれくらいだ」

「あんたは、いつから一夏と一緒にだつたの？」

「小二くらいだろうか。そこから小五の初めに諸事情で転校せざるを得なかつたが

……」

「あたしも中二の時に転校することになつちやつてねー……。中々私たちつて似てるわ

ね、もつと話しましようよ」

「ああ、いいだろう」

「お二人の話、私にもお聞かせください！」

「これは一夏たちのことを探るチャンスだと思つたセシリ亞も話に混ざり、女子三人で話はヒートアップしはじめる。

「俺たち完全に蚊帳の外だな」

「そだねー、というわけで千冬さんに怒られる前にさつさと食べちゃおうか」

「そうだな、もう千冬姉の出席簿アタツクは食らいたくない……」

午後は千冬先生の担当する実技だ。

二人は大急ぎで昼食を食い終わり、着替えに行つた。

第3話 鈴の音一つ（6）

第三アリーナ。

授業が終わり、誰もいないこの場所で、一夏がセシリ亞に特訓を受けていた。

「——という風に三次元躍動旋回^{クロス・グリッド・ターン}は行います。ご理解いただけましたか？」

「うーん……細かくて分からないな……」

「そうですか……」

「悪いな、こうして付き合つてもらつてるのに」

「まあ、一夏さんはほどんど勉強できないままでここに来させられたと忍さんに聞いてま
すし、気にすることではありませんわ。わたくしも碎けた説明が出来ませんし」「そ、そうか……忍がいれば多少は楽になつたかもだけどなあ」

「今は筈さんと剣道してらつしやるんでしたよね」

「ああ。公式試合はしなかつたけど、まあまあ強かつたな」

「?なぜ出られなかつたのですか？」

「それはな——」

「はあああああああああ！」

箒が叫び、竹刀を忍の脳天に向けて振り下ろす。

「ツ!!?」

忍は、竹刀で箒の攻撃を防いだ。

「イヤアアアツ!!?」

そして忍は、逆手に持つたもう片方の小さい竹刀で突きを繰り出した。

「ツ！」

箒は、忍が繰り出したその突きを、竹刀の角度を変え、防いだ。
そして、忍が鎧迫り合いをやめ、距離を取ろうとした時を狙い、

「はあああああああああ！」

箒がお返しとばかりに突きを繰り出し、忍の喉元に当たつた。

「一本！突きあり！」

先輩の一聲で、その試合の終わりが告げられた。

「……たあー！負けたー！」

忍が、防具を片付けた後、そう叫んだ。

「お前と打ち合うのは久しぶりだつたから勝てるかどうか不安だつたけどな」

「筈が少し笑いながらそう返した。

「全国大会優勝者の余裕か、このー！」

「そう言いながら、忍がボカボカと、筈の頭を叩いた。

「はは、すまんすまん、そういうつもりじゃないんだ」

筈が笑いながら、忍の攻撃を手で受け止める。

「じゃあ、どういう意味？」

忍が尋ねる。

「長く離れ離れたから、私がお前たちの太刀筋を忘れてないか不安だつたんだ」

筈はそう返した。

「結局負けちゃつたけどね」

「そうだな。そして、それが私がお前たちの太刀筋を忘れてないことの証明にもなった」

「僕たちが忘れているだけかもよ？」

「なら、何度もお前たちと戦つて、それを思い出してもらい、その上で勝つまでだ」

「ふーん。ところで、一夏に勝つたら何かご褒美でももらうの？」

「ゞ、ゞ、ゞ、褒美つ!!?」

忍にそう聞かれた筈は顔を真っ赤にした。

「ははつ、冗談だよ。じゃあ、また明日ね」

そう言つて、忍は手を振つて、剣道場を去つていつた。

(全く……あいつはいつも私をからかつてくるな。だが、不思議と不快ではない。むしろ楽しいと思える。こんな日々が続いて欲しいものだ)

篝は、心の中でそう思い、口角を上げた。

(ご褒美、か……)

そう心の中で呟くと、篝は更衣室に向かつていつた。

「なるほど……、剣道では二刀流は試合に出られませんのね」

セシリシアがそう呟く。

「ああ、大学生になれば二刀流の公式試合も出来るようになるんだが、忍は多分、俺たちと一緒にでいられるための手段として剣道してるみたいなんだよな。それでもそこそこ強いんだからすげえよな」

一夏はセシリシアの言葉にそう返した。

「ですが、二刀流なんて使えば誰でも勝てるのではなくて？」

セシリシアが疑問を呈する。

「まあ、皆そう思うよな」

一夏はうんうんと首を縦に振り、こう続ける。

「でも、二刀流はそんな簡単にできるもんじやないみたいなんだ。箒も強くなるため
だつて言つてやつたことあつたんだけど、無理つて言つて、その翌日に筋肉痛起こした
みたいなんだ」

その言葉を聞いて、セシリアが驚愕の表情を浮かべる。

「えつ、あの箒さんが、ですの？」

「ああ」

「箒さんは力強い雰囲気が漂うお方ですから、出来るとばかり……」

「そもそも竹刀が重いからな。箒も小学生だつたし……。両方小太刀だつたけど無理
だつたつてさ」

「忍さん、一体何者……？」

「さあな……。あいつが誰なのかなんて関係ない。俺たちは同じクラスの仲間だろ？」
「確かに……その通りですわ！」

セシリアが立ち上がる。

「さあ、特訓を続けましょう！」

「おう！」

「結局ダメだつた……」

ピットから帰ってきた一夏が、廊下で項垂れる。

「一夏、お疲れ！」

スライドドアが開いてそこから鈴が現れた。

「はい、これタオルとスポーツドリンク。少しぬるくなっちゃったけど」

「おお、サンキュー！運動後に冷たいものを流し込むと体にダメージを受けるからな」

一夏はそう言うと、スポーツドリンクを一気に飲み干した。

「あら、鈴さん？」

それと同時に、セシリ亞が別のピットから歩いてきた。

「セシリ亞もお疲れ様。あ、セシリ亞も飲む？」

「お心遣い、感謝しますわ、鈴さん」

「どういたしまして」

そして、セシリ亞もスポーツドリンクを啜るように飲み始めた。

「それにしても、変わつてないね、一夏。若いくせに体のこと気にしてるの」

「等等さんに聞きましたが、全くその通りですわね……」

「あのなあ、若いうちから不摂生してたら駄目なんだぞ。クセになるからな。最終的に

泣くのは自分と家族たちだ」

「ジジくさいよ」

「う、うつせーな……」

にやにやしている鈴は、一夏には記憶にある彼女とはどこか違っているように見えた。

一夏は鈴を、女としてではなく、ただの友達と認識していた。

だが、今の目の前にいる少女からは、あの頃にはなかつた女性らしさ、といったものを感じた。

（いやいや、高校生にもなれば多少なりとも変化はあるはずだ。鈴もそんな感じだろ）

そう思い、一夏は首を横に振り、頬を叩き、どこかに行きそうだつた我を取り戻した。

「どうしたのよ、一夏」

「いや、少し頭がぼーっとしてた」

「一番健康に気をつけろって言つたあんたがそんなんはどうすんのよ」「あははは……悪い」

そう言つて、一夏は頭を搔いた。

「ところで、一夏さあ

鈴が一夏に何かを尋ねようとした。

「ん?なんだ?」

一夏はそれに気づき、続く言葉を求めていた。

「やっぱあたしがいなくて寂しかった？」

鈴はそう問いかける。

「ああ、遊び相手がいなかつたからな。五反田は家の手伝いが忙しくなつて遊べなくなつて、忍も遊べる状況ではなかつたからな、寂しかつた」

「そつか、今度はあたしたち四人で遊びたいわね」

鈴はそう言つたが、

(そういうことじやないわよ……)

内心ではそう思つていた。

少し頬が染まり、曇つた鈴の顔を見て、一夏が大丈夫か、と声をかける。

だが、鈴はなんでもない、と言つて笑顔を見せた。

(恥ずかしくて言えるわけないじやない……)

一夏は、そうか、と言つて、再び口を開いた。

「そういえば、忍は五反田とは遊んでなかつたな。俺たちは基本あいつの家に行くか外に行つてたけど、忍は……」

それを聞いて、鈴の顔がまた曇る。

だが、それは先程頬が染まつた曇り方とは違うものであつた。

一夏も同様に顔を曇らせる。

それを見て、セシリ亞は忍に何か事情があるのかもしれないと思つたが、それが何かまでは分からないので、聞こうとしたが、何か聞いてはいけないものなのかもしれないと思い、躊躇つた。

「……そういえば、セシリ亞は忍のこと知らなかつたよな」

「そ、そうですけど……。でも、知らなくとも、わたくしはお友達になりたいです」

「ありがとな。それ聞いたら、忍もきつと救われるよ」

「そう言うと、一夏は一回咳払いをして、こう言つた。

「じゃあ忍が最初この学校に嫌悪感を顕にしてた理由も言うよ。でもここだと話しづらいな……」

「なら、一夏の部屋にしたら？」

鈴が一夏にそう聞くと、

「いやあ、今散らかっててさ。土日に持つてきた荷物が多くてな。まだ仕分け中なんだ」
一夏がそう言うと、

「一夏が片付けられないなんて相当ね……。ならあたしも手伝うわよ」

「わたくしも手伝いますわ！」

「い、いや、俺の荷物だから俺がやるよ、じゃあ後になつたら呼ぶから待つてくれよ」
そう言って、一夏は自室まで走つていった。

二人はそんな一夏を見て、呆然とその場に立ち尽くしていた。

第3話・鈴の音一つ（7）

一 夏と忍の部屋。

「そこに一夏は一人で何かをしまつていた。」

「あとはこいつとこいつと……。なんか忍に悪いな、けど鈴たち呼ぶことにしちまつたし、誰にも言わない約束をしたつてことは、知られたくない事だつてことだらうし、しまわないと」

一 夏がしまつっていたのは、忍のぬいぐるみだつた。

「こいつらが、俺がいない間にも、忍の心の支えになつてたんだよな……」

ぬいぐるみのうちの一體を、一夏が優しく撫でた。

と同時に、ドアが開く音がした。

「お、おい！呼ぶから待つてろつて……」

一 夏が振り向き、そう言いかけると、

「……僕そんなこと言われてないんだけど」

そこには、タオルとスポーツドリンクを手に持つた忍が立つていた。

「ところで、なんで僕のぬいぐるみ隠してるの？」

「そ、それは……」

「……なるほど、そんなこと言つたんだ、一夏」

忍は仏頂面のまま、一夏が、鈴たちを呼んだとという話を聞いていた。

「わ、悪い……」

「別に怒つてはないよ。ただ、誰でも通すのはよくないよ」

「お、おう……」

「まあ、鈴は問題ないな。鈴は僕の過去を知つてて、その上で僕にかまつてゐるわけだし。
ただ……」

「ただ？」

「問題はセシリ亞の方。今はあんな感じだけど、そもそもあの子、女尊男卑に乗つかつて
僕らを見下してたんだ。そんな人に僕だつたら過去まで話す気は起こらないかな」

そんな忍に、アルヴィトがこう言つた。

『ですがマスター、相手は代表候補生。イギリス代表の卵という名誉な称号がある以上、

それを自ら傷つける事はないと思ひますが』

(いや傷付けてたけど。ズタボロにしてたんだけど)

『あれは多分、下等と見ていた種が、自分と同等以上の立場にいることに対する恐怖心で

しよう。見た感じ、プライドが高そうな方だつたので『

（そんなもんなのかなあ）

『とにかく、マスターがここにいれば、マスターを蔑む発言は慎むと思います。代表候補生と言われるほどの頭の良い方なら、マスター達の価値は理解できると思います』（……アルヴィットって割と詳しいね。やっぱりISだから？）

『いいえ。マスターと一緒に、私も学んでるからですよ』

（そつか）

アルヴィットが自分と一緒に勉強してるとと思うと、忍は少し嬉しくなった。

「……よし、一人を呼んで。腹を割つて話そう」

忍は一夏の方を向いてそう言つた。

「……いいのか？」

「セシリアを信じてみる。でも、信じるのはこれ一度きりのつもりだから、その時は僕の見る目がなかつたつてことで」

「分かつた。悪いな、忍」

「今度何か奢つてね」

そう言うと、忍は少し悪い笑みを浮かべた。

「分かつたよ。お前のこんな重い話を他の誰かに言うくらいだから、それくらいはする

よ。何がいい?」

「じゃあバニラアイスで」

「まだ春じやねえか……。腹壊すぞ」

「好きだからいいじゃん。ここ最近暑いし……」

「それはお前がどんな時も長袖着てるからだと思うぞ。ISの時もジャージ羽織らないといけないんだからな」

「あはは……。鈍臭くてごめん」

「鈍臭いのは俺も同じだよ。俺がしつかりしてれば、忍を傷付けずに済んだし、千冬姉も……」

「それは過ぎたことだよ。仕方ない。あの件については、僕も男だ。僕がなよつちかつたから招いた事態だ」

「それは絶対に違う! お前は頑張つてミサイルを撃墜したんだ。なよつちいことなんてこと、絶対にない」

「ISの機能に助けられたからだよ。僕は、一夏が信じているような、ヒーローなんかじゃない」

「ヒーローなんて、最初から信じてない」「えつ……?」

「そんなのがいるなら、俺もお前も助けてくれたはずだ。でもそれをしてくれるヒーローは、現れなかつた」

「一夏……」

「だから俺は、ヒーローなんて信じてないし、信じない。誰かが困っている時に都合よく現れるヒーローなんて、いやしないんだ」

一夏はうつむいて、吐き捨てるようにそう言つた。

忍は、そんな一夏の手を握つた。

「……そんなことないよ」

「忍……？」

「僕にはね、ヒーローがいるんだ。白い鎧を纏うヒーロー」

そう言うと、忍は一夏の顔を見据える。

「へー、そんな奴がいるんだ。スゲえな」

「鈍感……」

「へ？」

「僕のヒーローは君だ、一夏。僕がいじめられてもうダメだつて時に、都合よく現れて助けてくれた」

忍は一夏の手を握り直し、微笑んだ。

「違う。俺はお前を助けられなかつた。いつつもいつつも、止めろと言つただけで、結局止
められなかつたじやないか！」

一夏は辛そうに叫んだ。

「でも、君は最後まで助けようとしてくれた。別の学校に行くことになつても」
「でも、俺は……」

「とにかくっ！一夏は僕のヒーローだ。それだけは事実だ。それに、僕だけじやない。
君に助けられた幼馴染がいるつてこと、忘れないで」

「お、おう……分かつた、覚えとく」

「よしつ！」

一夏がそう言うと、忍は白い歯を見せ、ニッとも笑つた。

第3話・鈴の音一つ（8）

「それじゃあ一夏、二人を呼んできて」

「分かった。呼んでくるよ」

「そう言つて、一夏は部屋を出た。

「……あんまり人にペラペラ話すことじやないんだけどなあ……」

忍はため息をついた。

少しして、一夏がドアを開けた。

少し微睡んでいた忍はハツとして、鋭い目つきになつた。

「お邪魔しまーす」

「お邪魔いたしますわ

ドアの外から、鈴とセシリアが入つてきた。

「いらっしゃい」

「へー、結構片付いてるじゃん。って、忍もこここの部屋なの？」

「うん。同じ男だしね。一夏から今回の件を聞いた。人のトラウマをそう簡単に掘り起

こさないでよ……」

そう言つて、忍はため息をついた。

「あー、ごめん」

「まあいつかはバレるものだつたろうし、仕方のない話だけどさ」

「あの、わたくしは忍さんにどんな過去があろうとも関係はないと思つてます。あんなこと言つたのは……、男に偏見を持つていただけですから」

セシリアのそんな言葉を聞いて、忍はセシリアに感謝しつつも、無駄足にして帰すわけにもいかないと思つた。

「そう、ありがとう。でも、それを話すために一人が呼んだんじよ？それでは無駄な時間をつけただけになつちやう」

「ですが……」

「セシリアのさつきの言葉に嘘はないんでしょ？なら、知つておいた方が蟠りもなくなると思う」

「……はい、分かりました」

セシリアは頷いた。

「そんなことがわたくしの知らないところで起きてたなんて……」

セシリ亞は、話を聞いて、相当驚いていた。

「当然だよ。あくまでこれは僕の学校の中での話。ずっと外国にいたセシリ亞とは何の関わりのないお話だから」

「ですが、わたくし、何も知らずにあんなこと……」

「人は世論に流されるから仕方ない。でも、世論の波に隠された真実を掴めたのなら抗うことも出来るよ」

「お前妙に大人っぽいこと言うな」

「お爺ちゃんっぽいこと言う一夏には言われたくないでーす」

「なにをー!?」

「やるかー?」

そう言つて、忍と一夏は叩き合いを始めた。

「あ、忍さん、一夏さん! そんなどしたら……」

さつきの話を聞いたセシリ亞が焦る。

「大丈夫よ、ほら、あいつら楽しそうでしょ?」

二人をよく見ると、お互い笑いあつてている。

「あの二人はあたしや筈よりも付き合い長いからね。だからお互い許すんだろうね。少し、忍に妬いちゃうな……」

「あら？ 鈴さん、何か仰りました？」

「ううん、なんでもない。それよりも一夏に聞きたいことあつたんだつた
そして、鈴は一夏に声を掛けた。

「ねえ、一夏」

一夏と忍は殴り合いとは程遠い喧嘩をやめ、鈴に目線を向けた。
「あの時の約束……覚えてる？」

第3話 鈴の音一つ（8. 5）

「約束？」

「そう。あたしと一夏が小学生の頃にした約束。…………覚えてない？」

少し顔を赤らめ、一夏にそう尋ねる鈴の表情を見て、

（あつ、これ等が一夏にだけ見せる顔だ）

忍はそう思い、鈴の想いを察した。

「えーっと、確か……」

一夏は考え込む仕草をする。

「……」

鈴は期待と不安が混ざり合ったような表情をしながら、一夏が答えを出すのを待っていた。

（どうか、一夏そんな約束してたのか。いじりネタ増えたかも）

そんな二人を見ながら、忍はそんなことを考えていた。

《マスター、今すごく悪い顔してますよ》

（嘘だろアルヴィト）

《本当です》

「あつ、思い出した!!?」

忍とアルヴィットが会話し始めた直後、一夏がハツとした表情で大声を上げた。

その直後、

ゴンツ!!?

という音が響くと同時に、一夏の頭に鈍い衝撃が走る。

「お隣さんに迷惑だからあまり大声出さないの」

「いてえ……。千冬姉ほどじやないにしても、忍の拳骨も中々痛いんだよなあ」

「殴られたら氣を付けないとね。僕よりも痛い人はいるし」

「お、おう……」

スーツを着こなし、右手に出席簿、左手にバインダーを持ちながら腕組みをする怒り

の表情の姉の姿を思い出して、一夏の顔は一瞬青ざめた。

「とにかく、約束、思い出せたぜ」

「ほ、本当!!?」

鈴が一夏にずいっと近寄り、一夏を上目遣いでみる。

「ああ。鈴の料理の腕が上がつたら毎日酢豚を——」

「そ、そうつ！それ！」

鈴の顔から不安が消え、期待一色になつた。

しかし、

「——おごつてくれるつてやつか？」

一夏があつけらかんとそう言い放つた瞬間、部屋の空氣にひびが入つたような気がした。

「…………はい？」

鈴が怒りを抑えたような声を出す。

「…………また鈍感スキルか？」

忍が頭を抑える。

「り、鈴さん、落ち着いてくださいまし」

セシリアがなんとか鈴を諫めようとする。

しかし、

「ん？鈴が料理出来るようになつたら、俺にメシをぐるぐる走してくれるんだよな？」

「…………は？」

「いやしかし、俺は自分の記憶力に感心——」

その瞬間、一夏は不思議な光景を目の当たりにした。

「……へ？」

一夏が見たものは、部分展開させたＩＳの右手で一夏を殴ろうとせん鈴と、左手のヒルドを部分展開し、それを受けた忍の後ろ姿だった。

セシリ亞も、それを見て、呆気にとられていた。

「どいて忍」

「どいてもいいけど、その拳で殴つたら、多分もう約束は果たせなくなるよ」

「……っ！」

鈴が拳を引き、右手の部分展開を解く。

それと同時に、忍もヒルドの部分展開を解いた。

「…………」

鈴は、肩を小刻みに震わせ、怒りに充ち満ちた眼差しで一夏を睨んでいた。

しかも、うつすらと瞳に涙が浮かんでおり、その感情を抑えるために、唇を噛み締めていた。

耐えられなくなり、忍の方に目を向けると、忍は、左手をさすりながら、冷ややかな

眼差しで一夏を睨んでいた、

こちらも耐えられなくなり、セシリ亞の方を見ると、こちらも怒っているような表情を浮かべていたが、二人と比べると可愛いものだつた。

「あ、あの、だな、鈴……」

一夏が何か話をそうとする。

しかし、

「最ツツツツ低!!? 女の子との約束を忘れるなんて、男の風上にも置かないヤツ! 犬に
噛まれて死ね!」

そう言つて、鈴はバッグをひつたくるように持つて、ドアを蹴破らんばかりの勢いで
出て行つた。

ドアが乱暴に閉まる音がして、一夏はやつと我に返つた。

「……ますい。怒らせちまつたな」

一夏は自分のやつたことを後悔した。

「一夏」

忍が声を掛けてきた。

「な、なんだよ、忍」

「お前は何を言つているんだ?」

(ぐあつ。なんか普段より忍が辛辣)

「一夏さん……今のは流石に酷いと思ひますわ」

「そ、そうだな……謝らないとな」

(でも、覚えてたのに、何がダメだつたんだ?…………ああクソツ、何も分からねえ)

「一夏は答えが出ず、頭を抱えた。

「忍さん、一夏さん、今日はこれにて、失礼いたしますわ、おやすみなさいませ」

「おやすみ。疲れが出ないようにな」

「お、おう、おやすみ……」

そして、セシリ亞も部屋を出て行つた。

「……風呂、入るか」

「そうだね」

さつきより口調は柔らかくなつたが、まだ冷ややかな声で忍がそう言つた。

「なあ、忍、何がいけなかつたんだ?」

「おごるから鈴が部屋から出るまで大体一夏が悪い」

一夏の髪の毛を洗いながら、一夏の問いを、忍はそう切り捨てた。

「おう……辛辣だな」

「なんでその他はほぼ万能なのにそんなこと分からぬの?」

「お前には分かるのか?忍」

「分かるけどその答えを見つけるのは一夏自身の役目だよ、僕が答え教えてもあー、なる

ほどで済んじやうでしょ」

「そだけどさ……」

「…………はあ、仕方ないな」

落ち込む一夏を見かねて、忍は一夏の髪の毛に付いた泡を流した。

「ならヒントをあげる。これが分かつたら答えとほぼイコールになる大ヒント」

「そんなヒントがあるのか、教えてくれ、忍！」

「分かつたから落ち着きなよ、じゃあそもそもその話」

そう言つて、そこで忍は一旦言葉を止め、息を吸い、こう言い放つた。

『『なんで料理の腕が上がらないと、酢豚を奢らないの？』』

「なんでつて……そりや……」

「酢豚を奢るんだよね？ それならお金を稼げばいい、幸い今なら代表候補生つてことで、多額の資金援助を受けてるはず。なのになんで料理の腕を上げるの？」

言い淀む一夏に、さらに忍は追い討ちをかける。

「いや、小学生の時の約束だから、料理店のコックとかを目指してたかもしれないし……」

「なるほど、確かにそうだね、でも、だつたらなんで、あの時鈴は顔を赤く染めてたんだろう」

「えつ……」

「さて、一夏は今回のペナルティとして、これの答えを導きながら僕の髪を洗つてください」

「ペナルティ弱いなあ」

「確かに、グラウンド五十周の方が良かつたかも」「いきなりハードルが上がつたんですけど忍さん」

「冗談。僕もそんなのできないし」

「だよな、じやあ髪洗うぜ」

「じゃあ明日までに追加のペナルティ考えとくから」「マジですか」

「流石にこの程度で済ませるのはないわ」

そして、翌日。

生徒玄関前廊下に【クラス対抗戦】^{リーグマッチ}という紙が貼られていた。
一夏の一回戦目の相手は——鈴だつた。

龍騎相打つ（1）

クラス対抗戦リーグマッチ日程表が張り出されて数週間経った五月、鈴の機嫌は未だ直らず、むしろ悪化していた。

一夏も忍からのアドバイスを貰つたものの、未だに答えが出さずにいた。鈴は一夏と会うことは避けて、一夏に声を掛けられても顔を背ける姿が見られるようになつた。

「一夏、答えは出た？」

忍が一夏にそう尋ねても、一夏には「まだ分からぬ」としか言えなかつた。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されているから、実質特訓は今日で最後だな」

空が橙色に染まり始めた放課後、一夏たちは第三アリーナへ向かつた。

世界で二人しかいないIS操縦者の特訓とあつて、皆興味があるようで、放課後のアリーナはほぼ毎回満席であつた。

その席を『指定席』として売つた二年生の生徒もいたようだが、その生徒は千冬先生

に制裁を下され、首謀者グループは三日間寮の部屋から出てこられなくなつたらしい。何をされたのかは：本人たちのみぞ知る。

「I S操縦もようやく様になつてきたな。今度こそ――」

と筈が言葉を続けようとするが、

「まあ、武術に長けている筈さんと、I S代表候補生のわたくし、そして忍さんが訓練に付き合つてゐるんですもの。このくらい当然ですわ」

初めての対等な友と呼べる存在、その存在に最後まで教えられるという事実に気持ちが舞い上がつたのか、胸を張つたセシリ亞が言葉を遮つてしまつた。

「…中距離射撃型の戦闘法^{（スソック）}は今の一夏の役には立たないぞ。一夏には射撃武装がない。普通は『後付装備』^{（イ・ライザ）}一があるのだが、何故か一夏の白式は『初期装備』《プルセット》だけだからな」

言葉を遮られたせいで、筈は少し不機嫌そうにセシリ亞に告げた。

「確かに。今後射撃武装を持つことがあるかもしないにしても、もつとさまざまな操縦技術を教えておくべきでしたわね…」

「まあまあ、それを教えるても多分一夏には難しかつたと思うよ。実際僕もかなり時間をかけたし」

忍が頭を抱えるセシリ亞を慰めるために、苦笑いしつつもそう言つた。

「おいそれどういう意味だよ！」

「一夏にはまだ早すぎるってだけ。下地が出来てない状態の入学だつたから、それを頭に焼き付けられるのはまだ早いって事。地道に予習と復習をしてけば、知識は身につくよ。ね？」

「お、おう…頑張る」

馬鹿にされたような気がして一夏が腹を立てたが、拗ねた子供を励ますように微笑みかけた忍を見て、怒りを引つ込めた。

「それでは一夏さん、今日はは昨日からの無反動旋回ゼロリアクト・ターンから始めましょうう」

セシリ亞に促され、第三アリーナのAピットのドアセンサーに一夏が触れる。

指紋・静脈認証により開放許可が下り、ドアがバシュツと音を立てて開いた。

「待つてたわよ、一夏!!」

そこには、いるはずのない人物、凰鈴音が立っていた。